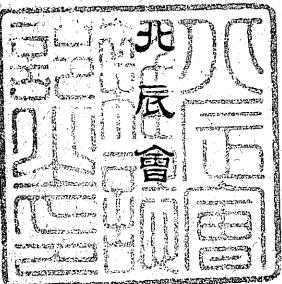


大正會雜誌

第五號

明治二十九年十月二十一日發行

(非賣品)



北辰會雑誌第五號目次

論 説

僞作文書研究の一例(三號の續) 浦井鍾一郎

石川縣農譽記 函峰村上珍休
祓除說 蓉湖浦井信

立志(承前)

莊子管見

噫我辰草校風を奈何せむ

林安繁
春秋原在文編輯子

千代の翠(完)
甘露の本性(完)
白山遊記

桐生愈虐
稻並幸吉
寂電生

文苑

亡友市村竹軒を想ふ

吐虹生

歌三首

香村茂富

全一首

島村他三郎

發句數句

秋竹々

嵯峨野の月

花曙散史

父やはいつこ

樂園

等數件

雜錄

秋氣逼る○運動場の秋○ボート成る○卒業證書授
與式○學年始業○式新入の諸君を迎ふ○外編輯難

天外生

大根布村附近の人類學材料

寂電生

雜報

秋氣逼る○運動場の秋○ボート成る○卒業證書授

桐生愈虐
稻並幸吉
寂電生

北辰會雑誌第四號

論 説

浦井鍾一郎

僞作文書研究の一例(第參號の續)

(彼得大帝遺言狀の續)

(九)汝等の全力を擧げて「コシヌタマチノーブル」及び印度に逼るべし。蓋し此等の地方を占領して之に據るものは、眞に霸を天下に稱すべきなり、是故に、一方に於ては土耳其に對し、一方に於ては波斯に對し、絶へず、戰を挑み、黒海の沿岸に於て造船所を建設し、漸次黒海方面に於て帝國の勢力を擴張せむことを勤むると同時に、「ペルチツカ」海の海上權を占めむことを怠るべからず、此等は將來帝國の目的を達せむためには、極めて必要にし

て、必爭の地なりとす、汝等宜しく波斯國の

同第八章、印度の貿易は、天下の貿易なり。

此所に據る者は、眞に歐洲の主たるべし、是故に、波斯に兵を加ふべき好機會を失はざる

「レジニア」第五章、「アウストリア」家を促して、土耳其人を歐洲より驅逐せしむべし。黒海の沿岸に造船所を建て、絶へず進みて、「コスタンチノーブルス」に向ふべし。

同第七章、帝國は、常に黒海、及び「バルチック」海を占領するを以て國是とするを要す。此兩所を得ると否とは、將來帝國國是の成否の分かるゝ所なり。

滅亡を促し、波斯灣に進み若し出來得へくは、「シリヤ」地方を通過して、古代の東邊貿易を再興し、因て以て印度に逼るの方法を講ずべし。此地は實に天下の市場なるを以て、異日此地方を占領し終らば、帝國は最早英國の資金の必要を感じざる時到來すべし。

(十) 勉めて澳大利亞國の歡心を求めて之と同盟を締結し、表面上同國が日耳曼の盟主たらむとする野心を援け、而して、(内密の手段を廻らして)、日耳曼王侯が澳國に對する惡感情を養成すべし。如此して、諸侯のある者が、彼に對して兵を擧げむべし。帝國の助力を請ふに至らしめんことを勉め、彼等帝國の助力を請ふに至らば、其機を失はず之に助力を與へ、進退を巧にして、終に將來其國を併呑すべき策を講するを怠らざるべし。

(十一) 澳大利亞國を囁して、土耳其人を歐洲より

レジニア第十章 勉めて澳國との同盟を求める。同國に媚ひて、其最も喜ぶ日耳曼一統策を贊助するを示すべし、而して、勉めて歐洲諸國、特に日耳曼の君侯等を煽動挑撥し、専ら澳國を敵視せしむる様に謀るべし。

レジニア第五章 同文

驅逐せしめ、其機に乘じ帝國自ら土耳其を占領すべし。但し帝國土耳其を占領せむか、澳國は欺かれたるを知り、我を恨み、我を敵視すべきを以て、其敵愾心を避けむことを要す。其爲めには、策の用ふべき者二あり、一は同國を挑撥して、他の歐洲の古國と戰端を開かしむるにあり、一は一旦帝國の略取せる地の一部を割き彼に與へ、暗はしむるに利を以てするにあり、而して、如此して一旦彼に譲與したる地は、後好機を窺ひ、彼より取戻すべきは、言を待たず。

(十二) 多數の希臘人は、政治上及び宗教上其政府と意見の衝突せるため、匈牙利、土耳其、及び波蘭の南方に散在しつゝあり、汝等宜しく此輩と結託して之を統一すべし、宜しく彼等の中心點となり、保護者となり、彼等の君主となり、若くは宗教上の主權を以て、彼れ

シニア第十二章 宗教的勢力を利用し、匈牙利、土耳其、及び波蘭南部地方に散在し居る希臘人の心を得べし、凡ゆる手段を以て、彼等をして汝等に信服し、汝を彼等の保護者と呼ぶに至らしめ。彼等の上に宗教盟主權を得むことを勉むべし。

等をして悦服せしむべし、彼等は敵中にある
汝等の股肱であるべし

(十三)瑞瑞典國分裂し、波蘭服し、波斯滅び、土耳其は降り、我軍備充實し、黒海及び「ペルチック」海帝國の艦隊を以て護るに至りたる曉には、帝國は宜しく、(別々に、且つ極めて秘密に)、先づ「ベルサイユ」の朝廷に就き、次に維納の朝廷に就き、彼等と共に、世界の帝國を略取分領せむことを申出すべし、次上二國の一にして、我申出を承諾したる時は、(其は必ず承諾すべしと思ふ)、其國と同盟を締結し、其國の兵力を利用して、他の一國を討滅すべし、而して後、更に事に托して、其國と兵を構へ、之を討滅すべし、是時に當りて、帝國は既に全東洋、及び歐洲の大半を領するを以て、其國を討滅するは極めて容易の業なり

(十四)若し以上兩國共に、帝國の申出を拒むに於ては、(其は或はあり得べし)帝國は兩國を激して互に兵を構へしめ、其倒れの有様に陥らしめむことを勉むべし、此危期に乘し、帝國は全力の陸兵を擧げて、日耳曼に臨み、有力なる二艦隊の一是、「アゾフ」海より、一は「アーチヤンゼル」の港より乗り出し、黒海及び裏海艦隊の護送し來たれる亞細亞の軍隊を以て、地中海より大西洋に出て、一方よりは佛蘭西を攻撃し、一方よりは日耳曼を襲ふべし、獨佛兩國にして滅ぶる時は、自餘の歐洲諸國は、風を望みて、一擊をも加ふることなくして、土崩瓦解すべし、如にして全歐洲は、悉く我版圖に歸すべきなり、否帝國は必らず彼等を征服し終らざるべからざる也、

(彼得大帝遺言狀終)

「レシュア」最早一瞬時すらも貴重となれり、帝國は宜しく秘に諸城砦を修備し、大攻撃の準備を爲すべし、而して極めて秩序正しく、且つ迅速の運動を起し、歐洲諸國をして迅雷耳を掩ふの暇なからしむべきなり、先づ別々に、最も秘密に、最も注意して、ベルサイユの政府に向ひ、次に維納の政府に向ひ、天下分割の策を提出すべし、魯國は、既に實際をして我申出を疑はしめざる様注意する事肝要なり、此策は大に彼等を喜ばしめ、隨ひて全東洋の主なるを以て、今や單に其名義を得む事を欲するの外他意なきを知らしめ、彼等をして我申出を疑はしめざる様注意する事肝要なり、此策は大に彼等を喜ばしめ、隨ひて以上二國間に、嫉妬の情を生じ、激烈なる争を生ずる事疑なし、是れ帝國の大に爲すべきの時なり、

・「レシュア」此戰のため、以上二國疲弊し、帝國は其軍備を整へ終りたる時、帝國は始めて其兵を來因河に進むべく、帝國は亞細亞の大軍を以て之に續き、一方に於て強勢なる艦隊を以て、一は「アゾフ」海より、一は「アーチヤンゼル」港より乗り出て、亞細亞軍隊の一部を黒海艦隊をして、護送せしめて地中海に顯はれ、此慄怖にして掠奪を喜べる亞細亞兵を放ちて、以太利、西班牙、及び佛蘭西を衝かしむべし、同時に來因河に向ひたる兵をして、全力を擧げて運動せしめば、向ふ所敵なく、必ず大捷を得て、終に歐洲の他の國々をも征服する事疑なきもの也、

立 志 (續)

林 安 繁

君見すやカーネーションの偉傑ハニベルを。紀元前一百三十年其父ハミルカの西班牙を征せんとし。兵を境上に觀し壇を設けて勝を天に祈るや。彼れ年僅かに九歳。切に隨はんとを乞ふて許されず、懼憤歎むなく壇に登りて手を犠牲に置き。慨然として謂て曰く。我成年の後此兵を領するを得は。羅馬は誓ふて馬蹄の垢珍たらんと。嗟黃童の抱負何そ一に大なるや。而して彼れか一生の歴史は抑も如何の消息をか吾人に齎らし來れる。其の晩年兵を率ゐて伊太利に入るや。ブリウス、シッピオのために本國を襲はれ。茲に天下の形勢は俄然として一變し。終にツアーマーの戰一敗地に塗れて憐むへし敗軍の將となり。卿家空しく城下の盟を結むて身天下に流浪し。憐れ一百八十三年ビシニヤの一孤宮戸を殘して黄泉の客となりしと雖も。其の單身寡兵を以て天下を敵とし。一たびアルブスの絶險を走せ上りて兵を伊太利の平原に見し。四たび羅馬の大軍と戰ひて之を破ぶり。羅馬の運命をして縷々絶えざること絲の如くならしめ。轉猛將良帥の聞えあるファビウス、マルセルス等をして寢食を綏んする能はさらしめし所以の者。豈に夫れ少年の抱負に背くと謂はんや。又見すやアレキサンダー大王を。父王非立戰勝ちて地を略すと聞くや。毎に嘆して曰く。嗚呼我父王地を略すこと此の如くにして歎ますんは。終に余が侵略の餘地なきを如何せんと。嗟最爾たる一小王國に人を爲りて。一大渾圓珠は已に彼が眼中にあらずと云ふか。何そ夫れ抱負の大なるや。而して一生の履歴は實に此抱負に背かざりしなり。嗟境上狹隘而かも從來夷狄視されたる一小マゼドンより起りて遂に歐洲を席捲し。ヘレスボンドを渡りて兵を小亞

細亞に觀し。遂にバルシーやを驅ふて馬をインダスの澎湃に飲ふに至りては。誰れか年少の抱負を虛なりと云ふ者そ。又見すや平象山先生を。齡僅かに弱冠嘗て詩佛を訪ふ。卷菱湖偶微醺を帶ひて坐にあるあり。刺を熟視して莞ふて曰く。佐久間修理名亦奇なる哉。抑も子何をか修理せんとするやと。象山凝視敢て答へす。菱湖重ねて問ふに及んで勵聲して曰く。我は天下を修理せんと欲すと。嗟先生の抱負亦大なる哉。而して此れ亦龜毛兔角には非ざりし也。嗟先生業未だ成らずして中途兎刃に斃れ。今は滿目蕭寥他奇あるを見す。僅かに蕭殺たる秋風の信北の野に彷徨じ。轉客心を亂すのみなりと雖も。夙に當世無謀尊攘家の間に在りて超然其の歸を特にし。之を始めにしては攘夷的開國を主張し進取的國防を主論し。之を後にしては公武合軀を痛論し。學は和漢に涉り洋を包ぬ。詩文を屬し議論を善くし。手工の妙は巨礮小銃を製造し。國臣の高邁は彼之を有し。左内の達識は彼之を有し。甲東の果敢は彼之を有し。門下の二虎は能く彼れが志を助くるに至りては。誰れか治世の能匠亂世の英雄と謂はざるものぞ。天下を修理せんと欲するの言亦信ありと言はざる可からざるなり。嗟ハニベル尙者ぞ。亞歷山何者ぞ。はた又象山何者ぞ。之れ或は一匹夫に非ずんば則ち一小王國の皇子のみ。何ぞ一耳一目の異なるあらんや。况んや三面六臂の異なきに於てをや。而るを世人仰て以て英雄となす。抑も何の故ぞや。他なし志を立つるの固きこと金鐵の如く。常住坐臥造次顛沛も念亦他あるに非ざればなり。夫れ余輩や同じく生を人間に受け。目あり以て之を見。耳あり以て之を聞き。脳あり以て之を断す。その横眼堅鼻直立して前行するの入たるに於て何の異なる所ぞ。然らば則ち精勵刻苦進んで已よづんば。何ぞ造詣す

る所なかるべき。人生由來七生の縁あり。若夫生前未だ達することをなさんば。七たび人間に生ると雖も何にかあらん。語に曰はずや精神一到何事かなざらんと。然るを自暴自棄乃ち能はずと云ふもの。誰れか其愚を笑はざる。自暴自棄は實に人生の大敵なるぞ。余又之を左内先生に聞く。

『古より俊傑の士と申候人とて。目四ツ口二ツ有之にてはなし、皆其志の大なると逞ましきとに由りて。遂に天下に大名を揚け候也。世上の人多く碌々にて相果て候は他に非ず。其志太く逞しからぬ故なり。志立ちたる者は恰も江戸立ちを定めたる人の如し。今朝一度御城下（福井）を踏み出し候者。今晚は今莊、明夜は木の本と申す様に。先きへ先きへと行き申候也。譬へは聖賢豪傑の地位は江戸の如し。今日聖賢豪傑に似合はざる所を取去り候得者。如何程短才劣識にても。遂に聖賢豪傑に至らすと申す理は無之。丁度足弱な者でも江戸行き極め候上者。竟には江戸まで到着すると同し事なり。』と

嗟孔子すら十有五にして學に志し。三十にして立つと謂ふ。而るを先生年甫めて十四。已に此の言あり（啓發錄を著せしは先生年十四の時也）。夫子と雖も亦三舍を避けんのみ。嗟偉なる哉偉なる哉。然り而して此言や。抑も一箇半箇の空言なりしか。否々然らす。先生齡僅かに二十有六。惜む可し一點刑場の露と消えしと雖も。南洲已に先生に服せしに非すや。此に至りて前言遂に虚には非る也。嗟乎左内何者ぞ予何者ぞ。彼や一箇越前の布衣。予はこれ宇宙の間乾坤の裡神州清潔の民。はた何の特なる所がある。嗟乎左内達す可し。歷山や象山亦達すべきのみ。英雄豪傑豈に

達し得さるの理あらむや。身に才なし能なしと言ひて屈すること勿れ。程一寸を進む。英雄に近づく一寸に非すや。程一步を進む。豪傑に近づく一步に非むや。若夫自暴自棄以て小成に安んじ一生を偷むか如きは。眞箇日本民族には非ざるなり。

然りと雖も英雄豪傑に抵る實に江戸の近きに似す。而かも其間に横はる荆棘榛莽茫々際を見す。煩惱妄想左支右吾。英雄豪傑に至るの道その何れに據るやを知ること能はす。轉多岐亡羊の嘆なくんは非ざる也。こゝに於てか荆棘を闡き榛莽を刈り。妄想を断し煩惱を拂ふの利器ながる可からず。利器抑も何とかなす。至誠なる者即ち是なり。何をか至誠と云ふ。乞ふ之を洪川老師の言に照せよ。

『性は誠也。之を尊崇して至誠と曰ひ。徳性と曰び。正法眼藏と云ひ。一眞法界と曰ふ。熟とするに性誠の外に神道なし。性誠の外に儒教なし。性誠の外に佛教なし。夫れ性誠の徳たる。上非々想より。下奈落に至るまで。渾淪して空處なし。天の覆ふ。地の載する。日月の照す。霜露の落つる。四時の循環。萬物の消息。皆這の性誠の徳用なり。其物たるや。虛にして靈。寂にして妙。萬物たるを味らす。物々總て無妄。只一物其中に在りて主宰となり。以て大道を成就す。是れ果して何物そや。亦甚奇怪也。初祖の所謂見性也者。其性誠の何物たるを明了にする所以也。中庸に曰。至誠息むなし。又曰。誠は天の道也。之を誠にするは人の道也。之を誠にすとは。明了にして之を行ふと言ふ也。然らば則ち人として之を誠にする能はざるは。則ち天道人道兩から失却し。大にその最靈たるの義に背く。故に孔子之

を百姓と謂ひ。釋老之を衆生と云ふ。佛祖聖賢の蠢民に異なる所以の者他なし。只自ら之を誠にして。以て人に及ぼすに在るのみ。孔子曰。吾道一以て之を貫く。釋老曰。唯此の一事のみ實なり。二は即ち眞に非らずと。是皆之を誠にするの至言なり。下略。原漢文

嗟乎。至誠の浩大なることそれ此の如し。然りと雖も之れ實に余輩常識の覗ふ可からざる所。暫らく之を平易に解せんか。至誠は忠なり、孝なり、仁なり、義なり。何を以てか之を言ふ。それ誠の至れるや人欲は茲に去り。人欲茲に去りて我見斷見茲に空しく。我見斷見茲に空じとして心亦虛なり。若夫此の如くにして以て君に事へんか便ち忠となり。若夫此の如くにして以て親に事へんか便ち孝となる。移して以て衆庶に對せんか便ち仁となり。移して以て邦家に盡くさんか便ち義烈の心となる。嗟忠や。孝や。仁や。義や。據りて以て一點の人欲は内に崩さうらんか。煩惱妄想直下に消却し。荆棘榛莽亦立地に排闢せんのみ。こゝに於てか長安の大道は直うして絲の如く。霞を隔てゝ英雄の貌容は模糊として認め得ん也。嗟快哉快哉。

然りと雖も。物に感して而して動き。事に觸れて而して遷る。これ一般凡庸の情狀。亦免る可からざるの數に屬す。こゝを以て茫々無際榛莽の間。根盡き氣疲れて。勇往奮進以て豪傑に達するを忘れ。小成に安んして自ら高しがし。難を捨てゝ易に就き。岐路を求めて深穿に陷入す。こゝに於てか至誠の心は漸く胸中を辭し去り。利器は變じて鈍刀となる。宜なるかな。男兒立志出鄉關と言ひ天下英雄在眼中と叫ひしもの。その僅かに羽翼を備ふるに至るや。便ち眼前の小利に安んじ。或は聲色に眩惑せられ爰々乎として己を守るに止まる。こゝを以て春秋幾たびか變はり裏萬

幾たびか更はり。常に人後に落ちて時勢に先んせらる。嗟是れ抑も神州國民たるものゝ做すべきところなるか。身慧才餘りあり。或は科學に工藝に。或は理財に法律に。各その長ずる所に從ふて一家をなし。慧才に誇りて德を治めず。權謀術數是れ事とし。或は無辜の妻君を擲ちて富家の女を娶り或は修身書籍を賣らんことを競ふて私利を營み。而かも恬として大博士と稱す。嗟是れ抑も神州國民たるものゝ做ふべき所なるが。『夫れ才と德とは異にして。世俗之を辨する者なし。通して賢と云ふ。此れ其人を失ふ所以なり。夫れ聰察強毅之を才と云ひ。正直中和之を德と云ふ。才は德の資也。德は才の帥也。人才德全盡之を聖人と謂ひ。才德兼亡之を愚人と云ふ。德才に勝つ之を君子と云ふ。才德に勝つ之を小人と謂ふ』と。之れ溫公綱目に書する所。嚮きの所謂大博士。便ち才德に勝つもの。是れ豈に小人に非ずして何ぞや。嗟生れて神州の國民たるもの。抑も小人となりて國家を蠹害せんとするか。將た又偉丈夫となりて身を邦家に斃さんとするか。夫れ至誠の心は均しく之を天に受く。然かも之を研くことをなさずして却て之を鈍くす。愚之より大なるはあらじ。須らく之を銳利にするの礪石を求め。斷々乎として迷を聞き。所謂猫の鼠を捕ふるが如く。鶴の卵を被ふか如く。勇猛精進左右を顧みず。英雄豪傑に達せざる可がらず。而して其の所謂礪石なるものを何とかなす。一に曰。行を改む。二に曰。言を謹む。三に曰。胸を寛にして氣を養ふ。四に曰。友を擇ぶ。五に曰。師を選ぶ。凡そこの五ツの者。皆以て至誠の心を勵まし鈍刀を變じて利器となすもの。乞ふ逐一之を論せん、

吾師某先生嘗て親しく戒むるに改行を以てし。言偶陽明椒山の言に及ぶ。言々誦すべく句々皆肺肝に徹す。余之を出して誦する毎に、未だ嘗て悚然として汗背を沾ぼさすんは非る也。蓋し曰く凡そ一毫の私欲の萌すとき。只此志の立たるを責むれば。即ち私欲便ち退聽す。一毫の客氣の動くとき。只此志の立たるを責むれば。即ち客氣便ち消除す。或は怠心生するとき。此志を責むれば即ち怠らす。忽心生するとき。此志の立たるを責むれば。即ち私欲便ち退聽す。一毫の客心生するとき。此志を責むれば即ち怠かす。妬心生するとき。此志を責むれば即ち妬せす。忿心生するとき。此志を責むれば即ち怠らす。貪心生するとき。此志を責むれば即ち貪らす。傲心生するとき。此志を責むれば即ち傲らす。吝心生するとき。此志を責むれば即ち吝ならず。蓋し一息として志を立て志を責むるの時に非るはなく。一事として志を立て志を責むるの地に非るはなし。故に志を責むるの功は。其人欲を去るに於ける。烈火の毛を焼き。太陽一たひ出て、魍魎潜消するか如きもの有る也。

又曰く。

一件の好事を見る時は、則ち便ち思量せよ。我將來必定行はんことを要せんと。一件の不好的の事を見る時は、則ち便ち思量せよ。我將來必定戒めんことを要せんと。一箇の好人を見る時は、則ち便ち思量せよ。我將來他と一般ならんことを要せんと。一箇不好的の人を見る時は、則ち便ち思量せよ。我將來切に他を學ふと莫らんと。則ち心地自然に公明正大行事自然に苟且を會せず。便ち天下第一等の人たらん。

嗟前者は即ち陽明先生満腔精誠の熱血を奮ふて弟守文を諫むるところ。後者は即ち明朝の一烈士楊椒山繼盛の嚴高翼鸞等群小を彈劾して逆鱗に觸れ、涙を飲みて冤に死せんとするや。則ち獄中より愛子に贈る所。若夫余輩にして身自ら弟となり子となり。襟を正うして之を読み、袂を抱いて之を誦せば。怡然として喜ひ。忽然として悟り。栗然として恐れ。潛然として涙自ら落つる者あらむ。噫此二大文字弟を思ひ子を懷ひ。延いて國家を思ふの至情に出づ。之を服膺して怠らずんば。其の行を改むるに於て間然する所なかる可し。余亦何をか謂はんや。只僅かに一言以て蛇足を添ふるあらんのみ。夫れ余輩一箇堂々たる大丈夫斷然志を立てゝ心の向ふ所を定めんか。英雄邦家の四字は造次頗沛も忘るゝことなく。而かも此身實に一私人の有に非すして邦家の有たるを知り。己を責むる重且周。衆中にありては獨の如く。獨に在りて衆中に在るか如く。一事一業一念一想と雖も之を謹み之を慇み。戰々兢々深淵にのそむか如く薄氷を履むか如く。思を立志の初めに顧み。範を英雄豪傑に則り。仔細に點檢し來りて則ち便ち思へ。是れ抑も英雄豪傑の思ふべきところなる乎。忠臣孝子の爲すべき所なる乎。松陰南洲をして吾位に在らしめは如何せんとはする。爲すは非乎爲ざるは是乎。爲して天地に俯仰して疚しき所なき乎。爲さずして却て機を過まるの恐なき乎。一に以て前過に鑑み英雄豪傑を以て己を責め。不可也々々々未だし々々々。英雄豪傑豈に此の如きの痴をなさんや。心を痛め思を凝らし。斷々乎として邪心を斥け。大圓の心鏡を研磨し來らば。鬼魅魍魎次第に逃去り。精誠眞如の月は輝々として光芒宇宙に瀟淵せざんば非る也。然りと雖も悔過の餘遂に痛苦喪心するに至るが如きは。まるに大に戒めざる可

からざる所。南洲翁夙に此の弊を憂へて曰く。

過を改むるに。自ら過ちたとさへ思ひ付かば夫にてよし。其事をば棄て、顧みず。直ちに一步を踏み出すべし。過を悔やしく思ひ。取縫はんとて心配するは。譬へば茶碗を割り。其の缺を集め合せて見るも同にて。詮なき事なり。

這般の取捨學者謹まざる可からず。夫れ改行の事その略を言ふ概此の如し。乞ふ是より言を謹む所以の要訣を説かんか。而して言を謹むの要は亦實に行を謹み過を改むる所以の者と相待て乃ち起る。

言を謹しむ。

凡そ心に思ふ所便ち發して言となる。此を以て利巧の人即ち利巧の言をなし。浮華の人即ち浮華の言をなし。粗笨の人即ち粗笨の言をなし。磊落の人即ち磊落の言をなす。此を以て言々句々假欺修飾一時を彌縫せんと欲すと雖も。而かも魚目卞璧識者瞭として而して之を知る。此を以て吾輩大丈夫たるもの。其言を謹み其語を慎み。一言を出す毎に必らず／＼思惟せよ。是れまさに大丈夫たる者の言ふべきところなるか。松陰南洲もと我が私淑する所。言ふは非乎言はざるは是非乎。言ふて人の短を發くの恐れなきか。言はずして却て機を誤るの恐なき乎と。さきに言を失せし所以の者に鑑み。人の喧々嘩々無用の談に耽るを見て自ら戒め。行ふて而る後に之を發せば。言ふ所其理に合し發する所便ち信あり。若夫片言單句を發するの間も。尙且心を用ゆると精確ならんか。心地自然に邪欲を交へず。改行と相率て至誠の心を發揚するに於て大効あらん。此を以

て孔子は『先づ其言を行ふて而る後に之に從へ』と云ひ。楠公正行を戒めて『坐敷の興と言ひて威儀を落したり高言雜談を好まざれ』と云ひ。兼好は『世人あひあふ時。しばらくも黙止することなし。必らず言葉あり。其言を聞くに多くは無益の談也。世間の浮説人の是非。自他のために失多くして得少くなし。これをかゝる時互の心に無益なりと言ふことを知らず』と言ふ。語異なりと雖も其の謹言を責むるは便ち一なり。

夫れ改行謹言の標準概此の如し。然りと雖も凡そ事の起る一瞬を曠うせず。激石火の如く閃電火に似たり。未だ逆め賭る可からざるなり。此を以て其顯るゝや必らず突如其の至るや必らず忽焉。此の間に在りて正襟危坐齶齶として改行に執し謹言に着し。經營慘憺其取捨に苦しむが如きは。其至誠を發揚するに於てはた何等の効果もあらざる也。須らく之れが規矩準繩を應用活動し。事にあたりて閑雅優々能く判し能く斷し能く決し能く行ふ底活潑々地の勇氣。豫め之が備へをなさんば。遂に所謂改行謹言には非るなり。是に於てか胸を寛にして氣を養ふの必要は起る。

(未完)

莊子管見

緒言

昔一乞丐あり、仙臺侯驕奢の風評を聞き其の友に謂て曰く、侯の驕奢之を聞く事久し侯の頭陀袋夫れ能く錦襷を以て製せられんかと、錦襷の頭陀袋事甚た奇なり、然れども之れ豈に乞食理想の

最も驕奢なるものにあらずや、今彼の莊周其の學に於て量るべからざる事猶仙臺侯の驕奢に於けるか如し、而して世人多くは乞丐の理想を以て擬するに錦襯の頭陀袋を以てし、才を藉り辯を持みて放言自ら樂むものとせり、噫亦寃ならずや、今予鷲鳩斥鷗の見を以て漫に大鵬の心を度り、世俗の妄を尤めて却て其の顰に傲ふ、眞に笑ふべきの甚たしきなり、而も昂然之を敢てする所以のものは、自ら腐鼠を以て鶴雛を喝するの鵠となつて、偈々者流の陋を現前に證せんとする婆心のみ、有用の用は予之を望ます、厭ふ所は唯夫れ無用の用なるか、

莊子名は周宋の蒙縣の人、孟子と粗時を同くす、此の時に當て周室愈陵夷して諸侯四に割據し、各詭計を以て相陷れん事を勉め、民道徳の心を失して日に機智を尊ひ、仁義法令を攪亂して滔々止なきに到る、彼乃ち蒼生か性を淫し徳を悖るを悲み、死生を一にし是非を齊くし、虛靜恬淡寂寞無爲の教を立てゝ南華の一書を著せり、其の書分ちて内外雜の三篇とす、而して其の内篇は莊子の筆に純なるも、外篇往々門人の附入あり、雜篇に到ては概ね後人の偽託にして、其の純不純如何の如きは、吾輩不文の徒と雖とも尙明らかに之を辨する事を得ん、然るに世人多くは門人の偽託を探て莊子の眞髓を捨て、囂々以て誹る事をなせり、噫斯の如きは猶擬花を嗅て芳なきを罵るもの、眞に抱腹絶倒の極と云ふへし、唯知れ言往々時事の非なるに激せられて中庸を失するあるも、議論頗る高遠にして理義甚た融合區々俗士の窺ふべきにあらざるを。

莊子内篇分ちて七篇とす、各命題あり逍遙遊、齊物論、養生主、人間世、德充符、大宗師、應帝王之れなり、而して其の逍遙遊に於ては、區々たる小智見を放れて心を自然の妙境に逍遙せしめ

而も能く世宜に應すべきを論じ、齊物論に於ては一箇無字を提起し來て、人我の見を捨て衆論を一に歸せしめ、是非を齊くし死生を一にすべきを論ず、養生主は猶養性と云ふか如く、順ふて害せざるの道を述べ、人間世亦處世と云ふか如く、無用の却て用なるを説く、其の形骸死生の外に大に尊ふべき所のものを教ふるは德充符にして、天を樂み命に安し能く恨むる所なきを教ふるは大宗師なり、而して最後に天に繼て極を以て、無爲にして天下を化するの所以を論せしもの、即ち之を應帝王とす、今予管見以て莊子を論ず、固より章を逐ひ句を尋ねて其の意を講ずることをせし、唯以上の諸篇に就て其の大意を探り、考へ交ゆるに外雜諸篇の要語を以てし、勉めて其の眞髓とする所を詳隠せんとす、而して其の筆を養生主に起し漸次應帝王に及ぼし、然る後初めて齊物論、逍遙遊を以て之に嗣かしめし所以のものは、蓋し思ふに此の二篇は莊子の本領にして、一生の心血注て之に存す故に開卷先づ之を掲げたるも、意義殊に高遠にして遽に解すべからず、依て之を他諸篇の後に譲る、固より低より始めて漸く高に及ぼさんとするの微意なるのみ、世の昧者常に稱す、莊子の書怪詭にして信すべからず、唯其文章の奇絶なる以て法とすべしと、而して識者時に其の書を講ずるあるも、亦文辭を先にして深く義理を究めざるもの多し、噫斯の如きは猶紫女を稱して先づ其の容色を擧くるもの、莊子焉んぞ瞑するを得んや、夫れ文章固より尊ふべきなり、然れども遂に餘技たるを免れず、若し文章の巧妙を以て議論の價値を定むべしとなれば、匡惠姫妃の如きも尙世界婦女の最も尊ふべきものとならん、天下何すれば此の怪理あらんや、彼の韓退之其の文に於て比なしと稱す、而して原道の一篇措辭の巧妙は乃ち之あらんも、

議論甚だ淺膚にして固より識者の一顧に價せず、噫文章の巧妙は之を原道以下の諸文に論すべし
南華の眞經豈に文辭の爲めに光を増すものならんや、故に予文章絶妙の處あるも敢て之を論せず
専ら其の眞髓を得るを勉めんとす、讀者希くは此を諒せよ、

本論

仰て天を見るに茫々として其の界を知らず、俯して地を望むに漠々として其の涯を見ず、大なる哉乾輿、此に生じ此に息するもの何ぞ限らん、而して人僅に其の一に居る、形を以て之を謂へは大と雖ども一丈を踰へず、力を以て之を謂へば強と雖ども百鈞に過ぎず、其の壽を問へば七十古來稀なりと云ふ、眇として何ぞ一に小なる、然れども意思敢て際涯なく、萬人を鞭撻して四海を掌握せんとするあれば、教法を宣流して百世の師表を期するあり、或は財を積み寶を累ねて富を天下に稱せられんと希ふあれば、耳目の好む所を恣にして逸樂戲嬉を逞うせんとするあり、趣向人によりて異るあるも、其の過分の望を抱きて相苦むは即ち等し、莊子爲めに曰く、

吾生也有涯而知也無涯以有涯隨無涯殆已而爲知者殆而已矣

此に所謂知とは意思の謂なり、涯あるを以て涯なきを追ふ、滔々として天下皆是なり、項羽は之を以て烏江に刎ね、基督之を以て猶太に磔せらる、石川五右衛門は爲めに釜中に烹られ、秦皇胡亥は爲めに望夷宮に斃る、狂か愚か得て之を知らずと雖ども、爲に謬られざるもの寥々として晨星より稀なり、然り而して其の好で危殆に赴く尙之より甚しきあり、即ち才を恃みて敵を喜び、器に誇て難に向ふ、焉ぞよく成す事を得んや、嘗て聞く良庖は歲に刀を更へ族庖は月に刀を更ふ

而して文惠君の爲めに牛を解きしの庖丁は十九年にして刀刃新に研より發するが如かりしと、是何によりて其然るか、族庖の月に刀を更ふるは大軀を斬て其の鋒を折ればなり、良庖の歲に刀を更ふるは背繁を斬て其刃を割けばなり、彼の庖丁十九年にして刀刃尙新に研より發せし如き八目全牛を見す厚き事なきの刀を以て其の間に入れ、恢々乎として刃を遊ばしむればなり、養生の道豈に他あらんや、莊子即ち教へて曰く、

爲善無近名爲惡無近刑緣督以爲經可以保身可以全主可以養親可以盡年

善を爲して名に近き悪を爲して刑に近く、皆之れ涯ある生の自然に逆ふて之を害するものなり、能く之に順ひ常に其の中を保たば、庶幾くは夫れ身命を保全する事を得ん、人皆惡を爲して刑に近くの非なるを知るも、善をなして名に近くの同じく非なるを知らず、大に憐むべきなり、夫れ澤雉十步に一啄し百歩に一飲す、而も樊中に畜はる事を諱めざるなり、彼の名は猶樊中の飲食の如し、焉ぞ爲に束縛せられて善に苦むべけんや、唯須らく高舉遠引利害の關せざる地に留まるべきなり、然れども人の生ずるや其の時に應ずるなり、人の死するや其の理に順ふなり生養ふべきなりと雖ども之に執着すべきにあらず、火傳ふ固より薪たるに盡きず、之に喜び之に哭す、焉ぞ夫れ道ならんや、昔老聃の死する秦失之を弔す而して自ら三號するを怪まずして老少の之を哭する或は子の如く或は母の如きを怪み、呼て遁天之刑なりと謂ふ、能く此の間の消息に通ぜば、生夫れ知るに幾からんか

然れども天下常に原始の素朴に同じき能はず、督に縁て以て經となさんとするも、外物の事情時

此を攬するあり大に謹むべきなり、昔衛の亂るゝや顔淵尙行かんとす、危邦に入らず亂邦に居らざる古より制とす、回の賢にして行を乞ふは深く民の苦を憐めはなり、而して孔子之に教へて火を以て火を救ひ水を以て水を救ふ、徒に暴人の前に死して民に益なきを云ふ、身を殺して仁を成す時に可なるを見るも、事に益なきを知て身を殺す豈に名を好む者にあらずとせんや、民の慘を憐む固より不可なるなからんも、爲めに身を殺して事に益するなくんば、其の愚及ぶべきにあらざるなり、夫の螳螂臂を怒らして以て車轍に當り、其の任に勝へざるを知らざるは、自ラ才の美なるを信ずればなり、之を戒め之を慎み決して己の美を積伐して事を謀るべきにあらず、孔子即ち回に教へて曰く

若能入遊其樊而無惑其名入則鳴不入則止無門無堂一宅而寓於不得已則幾矣

夫れ徳は名に蕩し知は争に出づ、名は相軌るなり知は争の器なり、二者共に凶器焉ぞ依て爲す事を得んや、彼の闇きを瞻るに虚室に白を生ず、虚なる哉虚なる哉、虚は實に内外二つながら忘れ知なく亦名なく鬼神尙來り舍らんとす、人間萬事殆んど問ふに値せし、天下何物が綽々として納められざるあらんや、

思ふに物に乗じて以て心を遊はしめ、己むを得ざるに托して以て中を養へば、至れり盡せり亦何をか作爲せん、能く無爲にして却て大成し、能く無用にして却て大用あらん、彼の櫟社の樹其の大牛を蔽ひ之を繋するに百圍、山に臨み高きこと十仞にして初めて枝あり、其の以て舟を爲るべき者旁に十數、而も匠石の爲めに顧みられざるは、散木にして以て舟を爲れば則ち沈み、以て棺

櫛を爲れば則ち速に腐ち以て器具を爲れば則ち速に毀け、以て戸を爲れば則ち液構し以て柱を爲れば則蠹すればなり、然れども櫟社焉ぞ爲めに病まんや、否彼は用あらるなきを求めしもの、今幾んど死して之を免る、却て其の大用を爲せしを喜ばん、彼にして用あらしめば焉ぞ其の大なるを到さん、夫の粗梨橘柚果蓏の屬實熟すれば則ち剝れ則ち辱らる、之れ其の能を以て生を苦むるものなり、大枝の切られ小枝の泄され未た天年を終へずして中道に夭す、豈に其の材の災する所にあらずとせんと、支離疏なる者あり頤齊を隠し肩頂より高く、會撮天を指し五管上に在り兩髀を脅と爲す、而も鍼を挫し繻を治めて以て口を餉するに足り、笑を歎し精を播けて以て十人を食ふに足れり、上武士を徵すれど支離爲に與からず、上大役あるも支離爲に關せず、而して上病者を賑へば則ち粟三鍾と薪十束とを受く、噫其の形を支離にするも猶以て生を養ひ天年を終へるに足れり、况んや其の徳を支離にして不材の材、無用の用たるものに於てをや、世亂れて人安ぜず國危くして士害せらる、處世の難き豈に畏れざるべけんや、然れども敢て材の美を積伐せず能く虛にして無用に居れば其免るゝに幾からんか、莊子即ち曰く

孔子適楚楚狂接輿遊其門曰鳳兮鳳兮何如徳之衰也來世不可待往世不可追也天下有道聖人成焉天下無道聖人生焉方今之時僅免刑焉福輕乎羽莫之知載禍重乎地莫之知避己乎己平臨人以德殆乎殆乎畫地而趨迷陽迷陽無傷吾行吾行郤曲無傷吾足山木自寇也膏火自煎也桂可食故伐之漆可用故割之人皆知有用之用而莫知無用之用也

味ある哉言、福羽より輕きも之を載するを知らず、禍地より重きも之を避くるを知らざる、滔々

として皆是なり、其の材を恃みて迷陽の傷く所とならざる豈に望むべけんや。今の時僅に刑を免れば夫れ可なり、莊子の言眞に我を欺かんや。

(未完)

噫我辰章校々風を奈何せむ

編輯子

緘默は男兒の本色に非ず、ちもふこといはざれば腹やふくれむ、聽くと聽かざるとは聽く人の意に任せんも、一片愛校の微衷に至ては、噫、知る人ぞ知る、
 校風とは何ぞ。其生るゝや學校と共にし其死するや學校と共にす、發しては獨特の精華となり、凝ては固有の元氣となり、興亡盛衰一に學校と命運を同くす。如斯にして校舍機械職員生徒等諸種の形式名目以外に或一物ありて其學校を結合組成する事、猶一家に家風あり一國に國風ありて、能く無形的統一の條索となれるが如し、是之を名つけて校風といふ。之れ無くんば學校は生命なく統一なく實在なきなり、生命なき者は生存せず、統一なき者は生存する能はず、實在なき者は生存するを要せず、生存せず、する能はず、するを要せざる者は初より生れざるの厄介なきに如かざるなり、既に生れ已に生存す、而も生るゝ必要ありて生れ、生存せる効果ありて生存す、宜しく之を庇保し育成す可し、而之を庇保し育成せむと欲せば、必先づ校風なる者の實在を認め、之を修養し振興し發揚するの大策を樹立せざる可らず、校風は學校の生存に隨伴せる必需不可缺的要件なればなり。翻て思ふ、我第四高等學校は如何、我辰章校々風は如何、我校は去明治二十年創立以來今に至て九星霜、職員五十、生徒六百、卒業生亦二百を以て數ふ、盛なりと謂ふべし。過

去現在に於る我校の昌圖生存誰か疑義を挿まむや、然らば我校々風の實在も亦誰か首肯せざらむや。然り、我校は確に第一、二、三、五高等學校と班を同くし勢を等くし些の遜色なきのみならず、是等諸校の上優に一步を占むる底の完美なる校風を固有せざるに非ず、所謂完美なる校風とは何ぞ。

山水靈淑々氣篤生偉人、高山江水由來人物を生む事多し、怒る時鯨鯢驚き靜なる時松聲和する北海の風濤は幾千年か健兒か守謠もりうたとなりし、連峯疊巒の間優に一頭地を挺でゝ春風秋月長へに白體々たる白山の一角は幾萬代か健兒が「目覺し」となりし、行くに千里の曠野あり、湖るに十里の急湍あり、天地正大の氣粹然として北陸の一隈に集る、正に是れ彬々たる豪傑產出の地、勤儉尙武の凜風此地に鬱蒸し磅礴する事久しくして且偶然ならざるを知るべし、然らば則此地百二十萬石の大都城に生れ态に此氣此風を呼吸し得たる我第四高等學校が、先天的に勤儉尙武の美風を有せる事、異なる地勢と風土とに薰化せられたる他諸高等學校と大に同じからざるものあるは、亦偶然に非るなり。勤儉尙武素是神州神ながらの道、千古萬秋渝る可らざる國是、臥薪嘗膽といひ積累蘊蓄といふ、唯勤儉あるのみ、國威宣揚國權伸張といふも唯尙武あるのみ、擴國の宏圖こゝにあり國民の本領こゝにあり。而我辰章校は校風として先天的に之を具有す、我校生徒は神ながらの道を道として行き、國民の本領を本領として行ふ、是豈大に他に向て誇るべきもの、一ならずや。誇る可くんば我將に大に誇らむとす、惜哉、我に誇るの實なきを奈何せむ。勤儉といひ尙武といひ先天的に之を具有すといふと雖、其實之を發揮し修養するの道を怠る事幾星霜、至善至美的

淳風も終に一部下底に萎縮し沈滯し、未以て全核を一貫する眞の校風なりと誇稱するを得ざるを奈何せむ、是豈千秋恨事に非ずや、校風の振不振は直に學校其物の振不振に關聯すること大なれば也。

然らば之を振興するの策如何、之を修養するの道如何、是吾人が満腔の熱涙を揮て諸君の赤誠に訴へむと欲する所の問題なり。

吾人は是に至て幾度か筆を下さむとして躊躇せり、此問題が吾人に取りて餘に重且大なるを思

へばなり、更に思ふ、逡巡は男兒の事に非ず、吾人は吾人の智囊を傾け盡して試み敢てせん耳。

一、學校は第二の家庭なり、路傍の驛舍に非るなり。

學校は吾人が最愛なる第二の家庭にして、第一の家庭に第一の父兄あるが如く第二の父兄として校長教師あり、吾人は家庭に於て父兄に事ふる道を以て學校に於て師傅に事ふるを要す、然らば第二の父兄が吾人第二の子弟を見る事正に親身の父兄が其骨肉の子弟に對するが如けむ、是に於て乎師弟の間怡々たる和樂は生じて眞に一家團欒の想あるに至らむ、彼の朝に張三を送て夕に李四を迎ふる路傍驛舍に類する者に至ては、吾人は之に附するに學校の名を以てするの術を知らざるなり。

一、校長教師は第二の父兄なり、風來の官吏に非るなり。

某校々長が其就職演説の冒頭に於て述べしと傳ふるが如く、校長教師は文部省より任命せられたる官吏なり、然れども一たび家庭に入て幾多子弟教育の責に當る以上は既に官吏に非ずして父兄

たり、中心より子弟として撫育する父兄ならんば師傅といふ可らず、中心より父兄として敬事する子弟ならんば生徒といふ可らず、斯の生徒ありて斯の師傅あり、斯の師傅ありて此生徒あり、斯の師傅の下に此生徒ありて始めて學校は眞に第二家庭たるを得む。

既に學校を以て家庭となす、家庭に於ける家風は學校に於て校風たり、父兄が家風の燒點たる如く、師傅は校風の標準とならざる可らず、師傅の威信は以て全核を壓服するに足る者なくんばあらず、生徒は全幅の赤心を捧げて之に敬事せざる可らず、師傅の心生徒之心一にこゝに歸す、是に於て乎初めて校風修養上最必要なる全校の一一致は望む可し、然れども是唯其理論なるのみ、理論豈容易く實行し得可けんや、况や地方を異にし習慣言語を異にし且學科及學級を均くせざる團躰に向て之を望むに於てをや。吾人の胸中之に向て更に二三策の往來するものなきに非ず、乞ふ試に之を説かむか。

一、寄宿舎を増築せよ、而之が爲に自治を許せ。

學校をして家庭たらしめよとは吾人實に之を望めり、然れども學校は講學の場にして、朝夕寢寤を同くし嗽盥飲食を共にする處に非ず、寄宿舎は正に此目的に應ずるもの、而此目的に應ずるものなるが故に家庭の眞味を擄する事を得るも亦こゝにあり、換言すれば寄宿舎は校風の中心なり。我核既に一寄宿舎を有す、亦こゝに視る所あるか、而も其寄宿舎なる者は狹隘僅に全生徒の七分の一を容るゝに足るのみ、此少數の人幸に家庭團欒の樂を頗つ事を得む、而も遂に校風修養を庶幾する能はざるを奈何せむ、且や聞くが如くんば當市下宿屋は學生の勉學と攝生とに適宜ならざ

るのみか、時に或は魔窟人を陥るゝ者なきに非ずと、嗚呼眞に如斯んば是七分六大多數の衆生を擧げて之を敵地に委するもの、豈危からずや。某校々長の籠城主義即寄宿舍を以て死守す可き唯一の居城となすの主義は適々以て我校に移すも妨げなからんか、敢て望む、經濟の許す範圍内に於て寄宿舍を擴大し、可得容丈け多數の生徒をして入らしめよ、更に望む、之が爲に自治を許せ、第一の家庭に父兄の監督を甘んぜし子弟は、今や第二の家庭に入り自ら己を治する術を知り而進て之を取らむとするに至れり、之が爲に望む所に從て自治を許せ、彼等は自己の願望を達し得たるを喜ぶと共に各自自己の責任の重きを知り、言行これ慎み、相戒め相携へて校風發揚の事に力めむとす。

一、全校一致の運動を獎勵せよ、

全校を通じ相一致して從ふ事を得る運動は數多これあらむ、行軍可なり兵式軀操可なり共に之を勵行せよ、ベースボールやローネティスや新に生れたる漕艇術と共に之を獎勵せよ、擊劍柔道弓術皆之を忽且に附する勿れ。是等の運動は時ありて學校を代表し一種の敵愾心を振起し、敵愾心は校風自重の精神を刺撃す。運動豈啻に軀力養成上必要なるのみといはむや、

一、制服制帽着用を勵行せよ、

學校講堂に出席するすら制服制帽を着用するなくんば、終に之を制定したる目的の那邊に存するやを知るに苦しむなり、制服制帽は辰章校々風の一一致を昭明にす、若夫れ外圍が内部に及ぼす勢力の甚大なるを知らば之を輕視する、可ならむや、

一、禮式を等閑視せられ、

制服制帽の一生他の同服同帽の一生に逢ふ、臂相接し面相合するも無縁の衆生迭に識らざるが如きは、兄弟相逢ひ相背くの失軌と何ぞ擇ばむ、翻覆雲雨は塵世の常情ならむも之を高等學校生徒間に見る、悲しからずや、途上會見必禮を以て之に應じ禮を以て之に對へよ、一點頭一舉手の勞何かあらむ。

尙有り、有は則有りと雖、幾十論策幾千萬言、終に之を如何せむ、論議の筆宜しく之を焼くべし。要は躬行實踐如何にあるのみ、唯躬行實踐といふ、豈空論横議をこれ事とせむや、若夫れ斯文を讀で空論となし、而も躬ら實行する能はざるものは、吾人と共に終に空論の士たるを免る可らず。噫々我第四高等學校は終に當年の松下塾たることを得ざるべきか。

文 範

亡友市村竹軒を想ふ

吐 虹 生

天下の秋は一葉に隨つて來り、人間の路は三峯に到りて盡くと、一葉未だ翻へらざるの時英靈は既に辭し去り、寒骨の一片今は敲て響なし、噫友人竹軒は逝けり
想ふ昨の夏雲は神樂の丘に愁へて、健兒幾百去つて散亂し、武藏野の月や宮城野の花、遠く櫻島の暮煙阿蘇の朝霞、只各その好むところに之く、而して竹軒や白嶽の秀を望んで笈を北陸に負

ひ、尾山城畔宏堂の裡、孜々として其學を受けんとせり、縁は奇にして余は机を竹軒と並べ、俱に學び共に談じ、未だ一歳に至らずして殆んど情好の舊知己に類するものありき。竹軒はもと難波の人、資性磊落敢て陋癖なく、好んで人に接しまたよく人を容れたり、而も放言壯語は氣を捻りて當世の事を談じ、酒を仰では英雄の蹟を嘲る、然してまたこれ一善罵童子たるにあらず、氣韻秀然として聲名頗る同人の間に高し、竹軒嘗て余の爲めにいふて曰はく、大丈夫漢の偉業を後世に傳へんとする者先づ百挫千折に屈せざる底の強健を要す、君が蒲質は余が悲しむところ、今にして全治するなくんば、他日事あるも身危險を攀るに適せず、唯平生の壯語をして空しく架空の一夢に歸せしむべしと、あゝ噫誰れか料らむや秀巖の巨松先づ風の爲めに摧け、溪邊の楊柳却て朽つるところを知らざるを。彼が歸省せんとするに當りて余は自畫を携へて其贊を請ひしに、笑ふて九月再會の期を俟ち、乃公の一絶を添ふべきかど、其聲なほ未だ耳朶にあり、九月九月何の再會かあらむ人は去りて一晝空しく存す、またこれ余れを斷腸せしむるの種而已。

顧れば竹軒が金城を辭せしの翌、余れ筆紙を挿んでかの古京に遊び、錦囊漸く重くして三十六峯の暮雲この裡にありといひ、古來遊人墨客の跡を慕ひ、半は朽ち半は傾きたる幾多殿堂を尋ねしことを印す、雄企宏圖遂に黃壤に寄せしか、蒼天茫茫恨竭くるの期なし、あゝ彼が生ける日は余れ殊に其地に遊び、彼れ瞑する時は、路既に百里を距たつ、去つて吊はんとする容易の事に非ず、若夫他日機を得て京都に遊ぶとするも、先きの詩情を促がせし地に、萬斛の紅淚を濺で、故

人を追想するの悲運を見んか

秋風梢に嘯きて陰蟲唧々たる時月下徜徉して切に古人を想はゞ、滿腔の悲愴は殆んど血を吐かしむるものあらむ、噫十萬億里黃泉の路、竹軒今は何れの邊にかゆかん。

浦 秋 夕

月影もわれも笞屋にやとりけり清見か浦の秋の夕暮

月 前 薄

野つかさによする尾花の浪間より月の御舟は漕いてにけり

秋 田

よつの海みなき國の大御田にあしねの穂波あふれぬるかな

日本刀

神代よりけかれぬくにのつるき大刀光ぬけいてゝたふとかりけり

草家三四かき根くの菊の花

發 句

秋 竹

砂立てゝ牛あゝき行く殘暑哉

子々

二百十日破蕉に風は無りけり
裏山の杉に秋立つやしろかな

草家三四かき根くの菊の花

あきかせや水害跡の屑わら家

尾花散るや雲去つて峰現るゝ

卒都婆から萬のとりつく権哉
反故ばかりの障子の寺や秋の雨
夕雲やもみぢのなかの大伽藍

嵯峨野の月

花 曙 散 史

月のかづらの影さえて、

草葉かくれに鳴く虫も、

入相告ぐるかねの音に、

夜寒の風は身にぞしむ、

あう生院のかたほどり、

心はそくもつたかづら、

梢をはらふさよらしに、
紅葉ふみわけ鳴く鹿の、

葦茂りてかどを閉ぢ、

これや浮世のなみ風に、

とりつく島もあら磯の、

落葉つもりて路もなし、

寄邊なぎさのあまを舟、

水の泡とぞなりにける、

くも間を渡るかり金や、

世のはかなさを夕暮の、

荻の上葉を吹きおとす、

こゝは何處か嵯峨の奥、

まつの袖垣やれはてゝ、

柴のとぼそにはへ懸り、

尾花が袖はまねけども、

外にあとづる者もなく、

羅綺にも堪えぬいにしへの、

憂きにやつれし尼法師、

雪と降る世の甲斐なさよ、

くも井のそらに宮仕へ、

朱樓紫殿におきふして、

光りのどけき春の日は、

つき影さゆる秋の夜は、

榮華の夢のさめてより、

琴ひく者はたえてなく、

翠のかみはいまいづこ、

きつゝ馴ても志かすがに、

胸の想ひぞやる瀬なき、

幸なき者は世にあらじ、

頼む甲斐なき果敢なさに、

内侍も流石消えやらぬ、

詫しくちくるくさの庵、

浮世を捨し身ながらも、

眺め出たるちもかけは、

はなの姿にひきかへて、

みねの櫻もいつしかに、

すぎしむかしは九重の、

君のみなさけ淺からず、

にしきの縛ひきかさね、

あほ内山にさくら狩り、

ことの調にすさみにし、

松のこずゑの風ならで、

瑤のうてなやはなの輿、

身は墨染ののりごろも、

いにし昔のしのばれて、

あもひまはせば妾ほど、

いねる建武の其むかし、
御媒介みをかだちにてはからずも、
妹背の契りこめしより、
かたみに語るむつ言に、
鶏の鳴く音をひと筋に、

消えて果敢なき夢の跡、
永き別れをなげきつゝ、

のこる妻は身ひとつに、
雨降るあした風の夜半、

書ける鴛鴦を見るにつけ、

賤の小田巻くりかへし、
たまく交すたま章を、

三歳の春をほしあへぬ、
待つ甲斐ありて其年の、

みちも静になりぬれば、
こゝに初めて優曇花の、

旅寢のうさもうち忘れ、

あやにかしこき大君の、
中將なかよしどとの千代かけて、
はなのあけぼの雪の夕、
かこちしことも泡雪の、
花にあらしの浮世とて、

きみは越路のたびの空、
慰むとてのあらざれば、
さみしく守る闇の戸に、

胸の思ひのくよくと、
獨りなみだにくれの鐘、

かたみにのこる命とし、
ころもの露に宿りつゝ、

秋のはじめに今は早や、
尋ねこよとの御つかひ、

春待ちえたる心地して、
はなの都をあとに見つ、

ゆくさためぬくさ枕、
關路かどもすきてさゝ波や、
あかつき告ぐる三井寺の、
海原とほく晴れわたり、
比枝山ひえいさんちろし吹き荒み、
風のまに靡きつゝ、
見えづ隠れつゆく舟も、
憂きの涙にそでねれて、
うつすもうたて鏡やま、
長き愛知川うちわたり、
すみゆくては長濱や、
峯みねのしら雲たてこめて、
風かぜをとむる柳が瀬の、
今日を限と聞くにつけ、
ひき田の里を過行けば、

いつかはめぐり逢坂の、
滋賀の濱邊を見渡せば、
鐘にほの明行きて、
なみ路なみじはるけき朝霧に、
浮き沈みをやかこつらむ、
のづゑにのこる枯尾花、
うちしほれたる其様も、
物のあはれは數ならず、
武佐立たてえて菅の根の、
こゝろ任せに廻りつゝ、
過ぎこし方かたを眺むれば、
何れを何とわきとはむ、
こゝろの絲の亂れでは、
未みはたがひに近江路も、
ひだりはひろき敦賀灣、

潮干に見えぬ石ならで、
なくなくちくる憂月日、
木の芽峠もこゆるぎの、
うきふし茂きたけが島、
名にしもをひて今立と、
かへぬ縁のすゑかけて、
はし越えゆけは吾夫は、
足羽繩手のよあらしに、
聞きてはいとゝ胸通り、

野末の露ともろどに、
思ひしことはいくそ度、
をしまぬ命今日までに、
うらみ残して散りませし、
せいじや必滅會者定離、
悟りし身には又さらば、
吾亡き夫のたましろに、

人こそしらぬ乾くまも、
たて石岬をよこに見つ、
急ぎくしてゆくさきは、
柿山あたり来て見れば、
聞くより又もいその松、
結ぶえにしや淺生津の、
暮行く鐘にちくられて、

夢路をたどる心地して、
うたれ給ひしふか草の、
消えてみあとを慕はんと、
思はぬ人にへだてられ、
いきながらふも今は只、
つまの菩提を弔ふため、
哀別離苦のことわりを、
塵の浮世をなぞ戀はむ、
さゞぐ讀經の手向こそ、

盡すこの身の勉めなれ。
折りしも袖の風さむく、
三聲ふた聲なきつれて、
あたり静に夜はさびて、

月を掠めてかりがねの、
雲井かすかに飛去れば、
さゝやく虫の聲たかし。

父やはいづこ

樂園

其一

すきくわにいたくさびあき、
むまや戸のかたびさし
つくろはんにはもせに
むしのこゑ住むひとの
ゆふ日かけ稚兒のきぬ
かぜにひらめく。

其二

きのふけふ
こしきには蜘蛛の巣みちぬ。

ほそりゆく夜具もなく
あきかぜの音にさみて
なかば落つれど、ひとしもあらず、
しげれるくさに、絶めるひまなし。
なしとおもへば、夜もすがら
さし入る背戸に、ねがへりつ
とやはと問ひまつはれど、

其三

いらへせん いきもくるしく、
とこの上の 見るからに そでぞ時雨るる。

にしき畫ひらき、
此のなかと をなごにあれど、

しなびたる かすかにこたふ。
そのまゝに ちとまさぐりて、

いだきよせ ねむれる子をば、
ほろくと むねにだきしめ、

身をしほる おとすなみだは、
はらわたも しづくなりけり、

がんぜなき おとすなみだは、
よそにくむ いさほ立て、

はらわたも ちぎるゝおもひ、
がんぜなき おとすなみだは、

なにゝやと ほぎきげ見ては、
聞くはゝの むねぞくるしき、

瘦せはてし ことどもは知らで、
ぼうや來と ほぎきげ見ては、

へんじよく ちぎるゝおもひ、
つゐ居るすがた、 はしたなき、

其四

はらわたも ちぎるゝおもひ、
がんぜなき ことどもは知らで、

なにゝやと ほぎきげ見ては、
聞くはゝの むねぞくるしき、

瘦せはてし ことどもは知らで、
ぼうや來と ほぎきげ見ては、

へんじよく ちぎるゝおもひ、
つゐ居るすがた、 はしたなき、

はらわたも ちぎるゝおもひ、
がんぜなき ことどもは知らで、

なにゝやと ほぎきげ見ては、
聞くはゝの むねぞくるしき、

瘦せはてし ことどもは知らで、
ぼうや來と ほぎきげ見ては、

へんじよく ちぎるゝおもひ、
つゐ居るすがた、 はしたなき、

其六

はらわたも ちぎるゝおもひ、
がんぜなき ことどもは知らで、

なにゝやと ほぎきげ見ては、
聞くはゝの むねぞくるしき、

瘦せはてし ことどもは知らで、
ぼうや來と ほぎきげ見ては、

へんじよく ちぎるゝおもひ、
つゐ居るすがた、 はしたなき、

はらわたも ちぎるゝおもひ、
がんぜなき ことどもは知らで、

なにゝやと ほぎきげ見ては、
聞くはゝの むねぞくるしき、

瘦せはてし ことどもは知らで、
ぼうや來と ほぎきげ見ては、

へんじよく ちぎるゝおもひ、
つゐ居るすがた、 はしたなき、

あさな子は ちゝまさぐりて、 せをたゝき、 とゝやはらづこ、
いしのごと つめたきはゝの、 ととやはらづこ。

石川縣農叢記

函峰 村上珍休

能之羽咋郡有燧谷焉。是爲石川縣農叢之所置也。乙未之夏。余賜暇浴湧浦溫泉。留旬餘日。歸路過燧谷。得縱觀之。蓋本叢。明治八年創於石川縣勸業場屬地。十八年四月移於此。稱石川縣農叢。雖結構素樸。規模頗宏壯。其地拾萬貳千六百步。實驗場七萬貳百貳拾八步。其貳萬四千參百七拾六步。即爲山林。有叢舍。有寄宿房。有養蠶室。有脫穀舍。馬牛鷄豚之圈。莫不悉備焉。來學者常數十人。分學爲三科。曰農科。曰獸醫。曰養蠶。以聽人自擇之。各有教師督課之。叢之四周皆山。蒼翠萬疊。如列屏障。中則土壤沃衍。眺望豁如。所謂串田野是也。即爲實驗場。時夏暇。生徒歸省鄉里。不獲觀其推鋤驅馬。以耕耨蒔植之狀。爲可憾也。古者以農立國。歷世帝王。篤勤諭生民至矣。但至其學。或未之有講焉。獨佐藤椿園著農政本論。藤森天山著農事。往々有及培養耕耘之法者。而未能精也。中興以後。取之泰西。乃有農叢之設。於是大學置農科。革。百度振作。將大謀增設海陸軍。固其所也。然孔子不曰乎。足食足兵。民信之矣。兵雖

彊食不足。何以行之。即農之不可不勸。亦今時爲最急。山長松平君。篤實長者也。教師皆得其人。督課有方。生徒日進。乃使諸縣知之。必將有所興起也。且余觀於此。以有所大感焉。因將大聲疾呼曰。世之搖唇鼓舌。無賴年少。盍顧時勢。秉耒耜。培植國本。明治乙未上秋。相模村上珍休記。

祓除說

蓉 湖 浦 井 信

祓除之起也舊矣。按史。諾尊到黃泉。追悔之。至筑紫檣原祓除焉。又曰。天祖閉居石窟。諸神歸罪素尊。而科之以千座置戶。使拔髮以贖罪。前者蕩滌汚穢也。後者贖罪惡也。後世夏冬之季。朝廷有大祓之典。延喜式敘之頗詳。徵之西籍。曾點之浴于沂。王羲之會蘭亭。此春禊也。劉禎魯都賦。人胥祓禳。國子水嬉。此秋禊也。何其與我邦所行大祓之事相似也。凡物不蕩滌則污。污則敗。況於觸污穢乎。語曰。面垢不忘洗。衣垢不忘澣。此人之情也。先王因人情以制禮宜哉。而無形者亦然。湯盤之日新。要亦不外此意。然而風俗污染。不可不蕩。紀綱混濁。不可不滌。其他凡可醜辱國家者。盡力蕩滌。不俟言也。抑人有犯罪。處死處謫。而或有徵財貨以祓其罪也。然則國家。亦有二種之祓除矣。曩者清國之汚蔑我邦也。興膺懲之師。是前者之祓也。已而清國乞和。則徵金帛土地。是後者之祓也。然而今也我邦之汚穢。全已蕩滌乎。千座置戶。無所缺乎。固非吾所得而知也。但祓除者太古之遺風。世人或以爲近孺子愚人所爲。吾則不啻迂之。更希

進一步耳。或曰大祓祝詞成于淡海之朝。故文中敘授幣物于琶湖。經櫻谷。達浪華海之狀。蓋然。明治之朝。若有觸汚穢。則投之橫灣。以達大西洋而止。是無乃先王制禮之遺意乎。旃蒙協洽六月。作祓除說。

山中浴舍雜詠原八

蓉 湖 漁 史

雲烟縹渺入簾來。必弗靈泉又快哉。自此病魔應避去。振衣一浴洗胸埃。

熱香思句意陶然。長日真成似小年。只憾山深風靜處。絃聲時有耳邊傳。山抱翠環清且幽。此間三伏似三秋。高懸簾幕斜陽逼。驟雨不來風滿樓。慚愧衰殘養病痾。征臺辛苦定如何。豪懷猶結山窓夢。湖島風雲淡水波。

銷夏雜詠

春 日 光 千 代

暮、熱、炎、々、午、熱、同。不堪浴後坐瓶中。閑携紈扇立庭砌。時有流螢來舞風。

全 風露淒々夜色清。亂飛螢火似星明。逍遙步月蓮池畔。涼味深邊聽水聲。

月照蘆洲夜色鮮。濂聲遙響白雲邊。風吹炎熱涼如水。來往徘徊避暑船。

全

近浦遙洲淡有無。模糊烟霧雨晴初。柳陰靜處閑垂釣。吹送晚風涼有餘。

殘暑招客

秋聲堂主人

抱琴古榻對蓮池。檻外綠波望太宜。忽使快風生座簾。不教炎暑冒簾帷。更嘉水碧連山碧。又愛松
坡與竹陂。入晚招客無別事。欲斟冷酒助吟思。

詠史

傑士青年通六韜。才兼文武氣何豪。忽拋人爵換天爵。早着緇衣脫素袍。雲水優遊嫌濁世。烟霞晦
迹喜禪逃。滿襟風月入吟咏。自有陽春格調高。

午睡

鼓噪互諍戰。萬兵忽敗走。是知北窗夢。門靜聽松濤。

雜錄

千代の翠

桐生愈瘡

(六) 當意即妙と千代の理屈

總て詩歌は、詩想あらざれば、口を衝きて發句すること能はず。嘗て聞く英の詩人ワット幼にし
て詩才あり。平生吐く處の句、皆渾然として詩をなせり。父之れを憂へ、一日ワットを呼びて之

を誠む。ワット涕を流して謝して曰く、Pray, father云々、而して其言亦詩句をなせりといふ。
ワットが此性行をよみて、誰れか此兒に將來の望を屬せざる。然りど雖も、教育其宜しきを得ざ
りしが爲めか、或は他に原因の存せしが爲めか、此兒は衆人の望を負ひながら、空しく墳墓に葬ら
れぬ。千代も亦斯くの如し。彼女が詩想の豊富なる、彼女が移用語に巧なる、吐くところの句、
悉く渾然として詩句をなせり。

加賀侯嘗て千代女が俳句に巧なるを聞きて、千代の寓を問ひ給ふ。千代、侯の御前に手をつきて、
忽ち發句して曰く

手をついて梅を見あぐる蛙かな

と。又或る時召されて、加賀侯の御前に出で、咄嗟どうさの中に吟して曰く御免なれ將棋せうぎのこまの箱の中

と。又或る時或女の醜きが、人に罵られてもだえつゝあるを見て、即ち之れをかばうて曰く

一抱あれど柳は柳かな

と。又或る時或武士が千代をこまらせんとて、夜更けてよりあわたゞしう其門かどを叩きければ、千
代女驚きて丸裸にて駆け出でしを、其姿はと笑ひければ

叩かれて裸で起る雪の竹

又千代女が嫁せしときの句

しぶいかは知らねど柿の初ちぎり

あり。是等は千代女が當意即妙の詩才を具へたるの證なり。吾人は固より當意即妙の詩才を以て、直に之れを天才となすものにあらざるも、また以て彼女が富豊なる詩想を有せしを證するに足る。然らば當意即妙とはいかなるものを指していふか。曰く咄嗟の間、何でもなきことに理屈をつくるを云ふなり。見よ、千代の句が、いかに愛らしき理屈を具ふるかを。

百生や蔓一筋の心から

三界唯心を譯したるもの。

兎も角も風に任せて枯尾花

これ安心を詠じたるもの。

九十九を餘所に持たる瓢かな

これ一瓢庵といへるところにて吟じたる句。

清水には裏も表もなかりけり

眞如平等も譯し得て妙。千代嘗て或人の八十の賀を祝して

百とせに最う一眠り柳かな

仇を恩にて報ゆるといふことを

手折らるゝ人に薰るや梅の花

加玲の句、「五色には一色足らぬ西瓜かな」をきへ

花一つ添へて五色の西瓜かな

ある時、畫を上に、讀を下にと乞ひける人ありければ、千代朝顔を畫きて其下に

朝顔や地に暎くことを危ふなかり

又伊勢の人、乙由と贈答の句あり。

花さかぬ身は静かなる柳哉

(乙由)
(千代)

(七) 結論

半化坊は千代尼句集の後に叙して曰く

(上露)いや姿はあはれるやうにて、強からず。いはゞよきをうなのなやめる所あるに似たりと、古人の詞の如く、つよからざるはをうなの句なればなり。

と、此評實に吾人の意を得たるものといふべし。

生理上、精神上に男女の區別あるは、更にもいはず。審美學上又男子と女子の區別あり。吾人は美麗(Beauty)を感得すること多きものを以て婦人とし、莊嚴(Sublime)を感得すること多きものを以て男子とす。美麗は愛すべし、莊嚴は敬すべし。これ千代の句が單に愛玩すべき所以なり。故芭蕉に對するが如く、未だ肅然敬畏の念を生ぜざるなり。

然りと雖も、詩人は男子よりも寧ろ婦人に適す。詩は理性に憩へずして、感情に憩ふ。詩の美は抽象的概念の上にあらはれずして、結象的概念の上にあらはる。然るに男子は理性奔展して、感情比較的に發達せず。抽象的概念を作ること多くして、結象的概念を作ること少なし。故男子は

詩人となるに適せざるなり。之れに反して、婦人は感情の發達せること特に著しく、其極動もすれば理性を没却し去らんとす。婦人は抽象的概念を作ることに拙劣なれども、結象的概念を作ることに長ず。故婦人は詩人に適する所以なり。千代の句柔は即ち柔なりと雖も、其感情を寫して天真爛漫の境に入りたるに至つては、渠れ芭蕉と雖も、三舍を避くべきところのものあり。

之れを全軸の上より評すれば、千代の俳句には平々凡々なるもの多し。之れ思ひを構へず、句を鍊らず、苟くも客觀の己れを感じしむるに足るべきものあれば、主觀忽ちこれに應じ、口を衝いて發句したりしものならん。これ千代が短處にして、而して又其長所なり。さはれ詩人として尊ぶべきところのものは、徒らに古人の糠粕を嘗めず、自家獨特の機軸を發揮し、以て詩界に一新生面を開くにあり。此點に於ては千代以て鼻を高うすべし。彼女は前人（丈草を除く）が未曾て夢見ざらしところの文致、擬人法を用ひて自家獨特の機軸を出しぬ。不幸、未だ以て詩界に一生面を開くこと能はざりしと雖も、自然と同化して、又自然を同化させたる彼女が俳句は、遠からずこれに依りて、其功を收むるもの顯はれなん。吾人はこゝに之れを預言す。

吾人は千代の翠を了るに臨んで、彼女が相當の教育をうけて、其天才の翼を伸さしりしを再嘆せんばあらず。吁、千代が性情、意志は尤も詩人に適したり。然りと雖も、時代は無残にも其翼を押さえ、其極これを切り去らんとしたり。見よ／＼、素園千代尼の靈は、かの幽冥に於てフツツと會合し、二人の涙時雨を爭ふにあらずや。あはれ、あはれ、

月ばかり松は榮えで八千代かな

（愈瘧よむ）

甘露の本性（承前）

稻並幸吉

予は今更に此一種の小虫の性質を観察したる結果により之を動物分類學上に照し如何なる種類のものなるやを斷定せんとする蓋し動物學上有益の事にして合せて予が源因確定を證明するものなり。

右の小虫は長サ平均曲尺二分餘、英尺一インチの九分一餘幅其半に居り背面は隆起し腹面は扁平にして恰も一平一凸のレンズ形をなし背面より虫目鏡（ルーペ）を以て觀れば全軸白色の細粉を蒙るたる十四五箇の關節より成り軸の左右兩側の邊縁は各其關節に對する一双の足様の突出物を有し腹面も亦背に對する關節より成り中央より稍々頭部に近く三對の足を有し各足の跗部（Tarsus）を膨大して擴すれば僅に一箇の關節（One-joint）より成り其端に鉤あり一條の觸鬚（Antennae）は頭部より長く出で絶へず之を動搖す其枝上にあるや木化部に群をなし表皮層に吸着して殆んど他に移行せず時々尾を昂起して露滴を分泌するとあるのみ然れども其充分生長して又樹皮より液汁を吸收せざるに至りしものは枝上を徐行して葉の裏面に到り適宜の所を擇びて靜止し尾端に近く純白色絮狀綿の如きものを出し以て己れの軸を包み合せて葉に固着し漸々頭部に及び最後には極めて僅に頭のみ出すに至るまで此絮狀物を繰り以て止む其大きさ小豆大に達す此有様に化せしものは殆んど死したものゝ如く決して運動せず試に葉より之を剥ぎ去れば虫の腹下には細小にして肉眼には漸く區別し得る如き橢圓形鮮黃色光輝ある無數の卵子を抱くと普通なり予が現今學校に所有せる標本は是等の全階級を觀るに便なり有志の士には何時にも縱覽せしむべし

今是等の特徴を以て動物學書に載るるに本小虫は昆蟲類中の同翅類(Homoptera)に屬する Westwood 氏の所謂一關節科(Monomera)中の皮武屬(Coccoidea)に編入すべしものなるや疑なし然れど其種名に至りては今遽に斷定する能はず何となれば予が觀察せしものは單に幼虫のみにして未だ(Pupa)より遂に完全虫に變形(Metamorphosis)したる好標本を得ざる故なり蓋し泰西諸書に掲載する *Dactylopius destructor*, Comstock 槩名 The destructive Mealy-bug の larva 及其卵に關する記載と殆んど一致するを見れば恐くば之れならんか假令否らざるも此種と極めて親密の位置にあるか或は其一變種 Variety と見做すも大差なからべしと信ず

元來本屬の虫類は一般に皮武(Häutläuse, Bark-lice)或は楯形武(Schildläuse,)と稱し諸多の書籍によれば必ず木化したる老小枝にのみ附着し決して新鮮にして木化せざる綠枝に集合せず春季其卵を出で、直ちに樹液の吸收を始め大凡十日間を経て生長の極點に達し又食せず葉裏に移行して繭様のものを造り雄虫は此中にて完全の變形をなし六七月頃翅を生じて飛翔し雌虫は單に產卵するのみにして自變形すると少く概ね其巢中に死し乾涸して卵子の天蓋となる而して雌虫の受胎は未だ枝上にあるに當り雄虫の飛來り其精を與ふるによるども全科の虫類には時として所謂單爲生殖(Parthenogenesis)にて雄精を受けずして單に雌虫のみにて產卵し若くば子虫を胎生するものあり曩々に出せし蚜虫及び *Lecanium* 屬虫類の如きは特に然り予が觀察によるに當て雄虫の如きものを見ず全く無翅の蟲爾たる小虫のみにして翅を有するもの一もあるなし由此觀之本虫も或は今正に單爲生殖をなしつゝあるものならんか而して其の larva となり枝上にあるは僅に

十日内外なりとくづば本月七八日頃盛んに甘露の下りしは正に本虫發育の最盛なるときにして從て露の分泌(即ち虫の排泄物にて約言せば尿の如く然らん)も隆なりしも十日十一日頃に及び漸々蛹となるに至りては恰も蠶兒が繭を造るの前には貪食し遂に食せず排泄せざると同じく彼の甘露の量に於て大に減少せし所以なり今假りに十二三日頃を以て其生長の極點に達せしものとすれば該虫の發生せしは本月二三日頃にして其分泌の最盛なるは五日と七八日頃との間にあるべく家人の發見せし頃は正に其最盛の後半期に當り予が實驗せしは其最終の上半期に當るものなり又更に諸書に就て本屬の虫類が斯く甘露を分泌せし實例の如何を調査せしに未だ其實見の記載されるるものを見ず之れ元より予輩の淺學寡聞なるによるといへども然れども亦古來之が觀察を遂げたる人の稀なるを證するに足る今本校の藏書中より僅に左の一節を摘載するに過ぐず

「上略」ローナル Réaumur 氏は曾て桃林に於て皮武の爲めに害されたる多數樹木の枝條は此小虫の爲めに無數の小穴を其表皮に穿孔せられ之より樹液流出し其樹下の土は全く濕潤せるを見た *Harris's "Harris's insects injurious to vegetation" Pag. 250.*

然らば本虫が如何にして何れの器官より斯く露滴を排泄するやは餘り世人の注目せらる事なるや疑なし之に反して同じく同翅類に屬し其の習性外形の少しく異なる二關節科 Dimera 中の蚜虫(Aphidae)は其尾端に近き背面に二條の排泄管を有する等明白にして從て其實例の如きは概ね之を記載せざるなし然り而して同科に隸する動植物は或點に於て頗る相似たるものなれば亦以て本虫が蚜虫の如き作用をなしたるも敢て怪しむに足らず況んや其實驗に徵して確實なるに於てをや

故に予は以上の所説を總括し断乎として左の結論を下すものなり

今回の甘露は其性質上從來のものと異なるとなく從て天より降る等の迷信は全く事實に相違し單に柿樹に繁殖せし *Coccus sp.* なる一種の虫類が其發育間に於て盛んに該樹皮より樹液を吸收し以て營養となし全時に一種の甘味ある透明の露滴を排泄せしものにして恰も人類が食して尿を排泄するが如きものたるや明かなり

尙予は右の甘露の附着せる葉二三を探り試験管中に入れ少量の微温湯を加へて其面の蜜液を溶出し此液にフェーリング氏試薬を加へ稍温めしに葡萄糖に特異なる赤色の亞酸化銅を沈澱したり仍て甘露の大部分は「グリュコース」若くば「レウロース」或は此二質の混合なる「インフルト」糖より成り他に二三の有機質例へば「ゴム」「デキストリン」の如きを含有するや疑なし故に無害のものたるや亦明かなり但し此化學的試験は唯其一斑定性反應を試みしに止まり詳細の検査を施さんには材料の多量を要し從て多くの日數を費さる可らざるにより之を省きたり觀者諒せよ

予今此の説明を終るに當り先づ岡村博士の懇篤なる指導を深謝し次に中野氏家人が特に予に與へられたる觀察の便宜に向て大に謝するものなり

又予は特に我校友並に縣下の公衆に向て大に望む所あり即ち過去にありて今はなきもの又は現在尙連續しつゝあるもの或は是より將來に於て起るべき種々異様の現象あらば其有形無形と大小とに論なく盡く是を新紙に報じ若くば本校に來りて其摸様を報導せられんとを決して一種靈妙不可思議のものとして看過するとなく飽まで其源因結果をして明かならしめんを要す之れ實に世の迷

朦朧を啓發するに鴻益あるのみならず合せて科學上に意外の光輝を添ふるものなればなり（完了）

白山遊記

寂電生

回顧すれば客歲八月我が皇赫怒宣戰の大詔を下し給ひしより六師堂々旅を整へて進み戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取り將校士卒櫛風沐雨祁寒隆暑を侵し飢寒餓凍に堪え萬死を顧みずして百難に赴く當時余輩空しく西天を睨して備さに其辛酸の狀を想ふ已にして黃龍頭を垂れ雞林序に就き一旦平和の局を結びしと雖も尙瘴煙蠻雨を犯して臺灣の地に向つて進撃を試むる近衛赤帽隊あり豈に悠々として苟且偷合に安んじ喘嘆轉臥するの時ならむや余輩茲に感あり皓嶽行を企つ蓋杖筇以て銃劍に擬し重荷以て背囊にかへ山川を跋涉し平野に暴露し隆暑に堪え祁寒に耐え躬ら其辛酸苦難の萬一を嘗むるに足らんか況んや身此地に生るゝ者誠に此名山を一見せざるものあるを今茲盛夏生平登攀の癖勃々として禁ずべからず然れども頃來の淫雨連りに山岳崩壊し河流潦漲し芻かに登攀を危めり十二日に至り雨漸く收まる適ニ二三同遊の友を獲遊意勃發抑ゆべからず乃ち五日間を豫期して十五日（八月）家門を出でゝ白山に登るの途に就き山の高きを極め谷の深きを究めて十九日歸るあゝ余は是れより征清征臺軍士の祁寒隆暑の寸分を味ひ飢寒餓凍の幾分を嘗め其嶽の高きを究め其景の奇なるを極め造化の高妙を品評し心は天地と融解し氣は自然と協合するに至る私かに期す此行余輩雄壯の氣概を發揮し磊落の心胸を開拓するに於て正に裨益する少からざるを十五日、黎明蚊張吹く朝風に夢は破られぬ、時に東方既に白ふして曉光微かに窓戸を射る、乃ち

急に起つて嗽盥し、朝餐を喫し訖て革囊望遠鏡を肩にし、輕裝家門を出て、同朋五人相携へ、徐に筇を曳ひて曉風に吹かれつゝ、地黃煎町街道に到る、時に五時四十分、既にして圓光寺村を經、萬頃の青田香稻正に實りて穗頭重く、風に隨ひて動搖する状恰も碧海の春瀾を疊むか如し、是れより迂路野々布街道に出て、鶴來に着し滔々たる手取の河岸に沿ふて往半里許、直海村に到る、村口一橋を架す、橋下幾彷徨流箭の如く、顛蹶して入り、悍然として瀑し汨然として潭す、是より福岡江津吉岡を經て行く數町、手取の水洗滌困泣、對岸の松林蔚然として好景愛すへし、是より道俄かに狭く、上は層峰天を摩し、下は懸厓削るか如し、衆稍疲る此に於て携ふる所の行厨を出し之を啖ひ更に勇を鼓して進むこと數丁、地中鑿々の聲あり、大鼓野は是なり、路は忽ち開き地廣くして夷からなり、前を望めば白山遠く雲表に聳へ笑ふて一行を迎ふるものゝ如し、想起す當年福島少佐歐亞の大陸を跋涉し、烏拉山嶺に叫んで曰く爾烏拉爾其高きに誇る勿れ、今吾爾より高きこと數尺と、彼を想ひ此を思ひ神氣勃如として爲めに大に振ふを覺ゆ、是より吉野清幽の景を探らんと欲し、草徑を踏みて黃門橋に到る、蓋橋は能美郡釜清水村と相通する飛橋にして、高く斷厓に架す、試みに高架梁上に立て河流を望めば足は踏々として眼爲めに眩す、俗に所謂橋上の樽水悉く盡くるも水滴未だ溪流に達せざる處、橋を渡り釜清水村に至る、迂路數百歩、巖石陥窪し井籠の如く清泉を湧出す、之を釜清水と告く、進みて猿窟に向ふ、左右巉壁斷崖を攀降する數歩にして道路を失ふ、是れ今夏の霖雨により河流潦漲奔騰して道路を掃蕩し盡せるが爲めか、再び橋を渡り九十九谷の山脚出入數十回をなせるを望みつゝ吉野往來に向ふ、忽ち路傍大老杉の

鬱々として晚翠を含めるを見る、近き見れば地上四尺許枝朶參差として垂る、俗に之を逆杉と云ふ、樹下一古碑あり、風霜石を銷磨して彫刻僅かに祇院和尙の四字を辨づへし、余等碑傍の石に踞して憩ふ、涼氣人を襲ひ深翠滴らんと欲し、炎陽中天にあるを知らず、况んや同遊山崎君携ふる所の貯水器を出し渴を醫するを得たるに於てをや、休憩多時、午後二時半吉野村石田某方に着す、金澤を距ること七里なり、當時惜らくは月影澤、雲龍山、千雲ヶ峰、大白山、ほひゝ山、白布ヶ瀧、三度櫻の勝を聞きて之を見る能はざりしと、後沐浴一番、一睡を貪らんとすれば、満室の蒼蠅拂へども去り難く、當るを幸ひ蟄し廻はり偃臥輒轉たらしむ、蒼蠅既に去り蚤蚊次て到り煩悶堪ゆべからず、加ふるに室内狹隘人をして窒息せしめんとす、即ち戸を排せば星は煌々として涼風拂に入り心氣自ら快爽漸く夢境に迎れり。

十六日、午前五時蹶起口を漱き朝餐を喫して五時四十分出發の途に就く、行くこと半里木滑村に着す、路岐れて二となる、右は白山道左は中宮道、乃ち右折す是より迂回登ること數町、右岸崩れて數丈可り亂石狼籍相倚り勢誠に恐るへし、汪々たる手取川其下を流れ岩礁起伏、流其間を過ぎ、碎て雪花となり疊て織文となる、激する者は珠を跳らし洄する者は輪を翻し、水石の勝亦極まれり、行くこと數丁にして手取の岸に下り左に轉すれば一橋を架す、是れ牛首川と尾添川と相合する處、河中の石低となり、礁となり、巖洞となり、殊形異態、奇詭歷落布置の妙名狀すへからず、是より路夷にして左右田畔皆陸稻を植へ、遙かに鬱蒼たる山林を見るのみ、左顧右盼女原村を經て深瀬村に達す、四顧皆山嶺峻嶮然として雲漢を摩し、手取川沿々として此溪を流れ、河

流湍激險澗或は碧を沈め或は白を抛ち層疊として下る、是より九層坂の峻を過ぐれば目を娛ましむるの山耳を洗ふの川にあらざるは莫し、午前十一時半桑島村に達す、山皆杉林山路險惡、左右皆杉樹、仰て火龍の中天にあるを知らす、半里にして白峰村に着す、實に金澤を距ること十四里なり、

誌に曰く此村は舊牛首風嵐の二村にして牛首川に沿ひ戸數凡そ五百餘、人民質素にして比屋蠶絲を業とす云々と、眞に然り、婦人今尙日常紋付裙模様の衣を着し宛然古代の民を觀るか如し、家屋は丹碧漆黒の巧なしと雖も結構堅貞三層或は四層に造れり、徃年山崎君此村を過ぎりしや街頭左の如き掲示を見たりと、又以て隱然一區内一致和合の實あるを見るに足らむか、

一祝儀婚禮佛事等の坐順は貧富の等級により之を定むる事

一貧富等級同等なる時は年長を取り同年なる時は抽籤を以て之を定むる事

但し名譽職員僧侶は此限りにあらず

一家族は戸主の次席とする家族なき時は戸主其席を譲る事

但し此場合に於ては戸主は次席者の次席とす

一貧富等級十五等以下の者は左の物品を着用及携帶すべからざる事

羽織、袢天、足袋、蝙蝠傘、革組下足、絹美の衣服、金銀造り者等

右之通り相定め候確に相守るべき者也

白峯村役場

十字街道巻煙草を燻らし傲然ステッキを振り身の程知らぬナマケ者、此掲示を見なば漸汗軀軀に治からん

時既に午を過ぐ、乃ち相言て曰く此村を經て綠陰を尋ねて憩ひ行厨を開かんと、竭蹶して行くこと數丁、涼を趁ふて一祠頭に到る、削壁懸崖一樹の老楓數條の盤根を生し枝葉鬱生翠滴らんとす因て厨を出して食し水を求めて之を飲み、腹飽きて眠ること半時餘にして相促して去る、時に赫日中天に輝き道路愈險惡、偶杉林に入るも草は蒸すか如く、疲勞時を逐ふて増し、苦汗下り王漿は流れ、前程を望めは山又山谷又谷、加ふるに今夏來の霖雨は河水の汎濫を來だし、橋梁道路を破壊し舊來の道路辨するに由なく、止なく左回右索迂路を廻らざるを得ず、其困難實に名狀すへからざるものあり、偶路傍の茅舍李菓を鬻く、乃ち大枚三錢を投して之を購ふ味甘美以て飢渴を醫す、實に西王母か桃菓もかくやあるらん、午後七時漸く市瀬高田方に着す、金澤を距ること十九里、宿舎は白山支脈の山脚に踞し、手取川の清流に面し、庭園巖石あり、水泉懸り滝して泉水を造る、清風徐ろに來て暑を忘る、此地有名の温泉場なれば衆争ひて湯に投す、浴後飽食一番寝に就く、身は既に夢中の人となり、只飛泉の聲夢に入るのみ、

此村白峰の東南五里にあり、宿所別に一區をなす大なるもの二戸相並ぶ、其一戸の簷下に炭酸泉を出す、近年西人之を發見せりと云ふ、浴室縱三間横二間高さ之に稱ふ男女二室に區割す、巖間に温泉噴す、函を以て之を貯ふ、泉質帶黃色にして透明ならず、蓋鐵鑄泉ならんか、室の大きさ三十人を容るゝに足らむ、

十七日、前日の疲労と昨日來の膝頭の腫物一時に膨れ疼痛甚だしくして歩行に難く、終日偃臥睡眠を貪り坐ろに今夜登山の銃氣を養ふ、午後十時食事畢り輕装を整へ宿を出つ、時に星は煌々として金風嫋々、明日の好晴言を待たず、心神爽快なり、已にして導者（俗に合力と云ふ）に荷を負はせ炬を掀け施々として行く、山下一華表あり、之を過ぎ魚貫して登る、坂路嶮惡喬木天を摩し蔭翳晦冥、惟導者の迹を踐んて進むのみ、一步一息愈登れば愈嶮迂餘曲折足を跛てゝ上る、宛然梯子に攀つるか如し、之を梯子坂の險とす、衆皆備々乎として惟懼る足踏きて炬滅せんことを、愈往きて愈奇なり、山の石を戴かざるなく、石の樹に依らざるなし、樹石罅に生し風雨剝蝕伸んと欲して伸びず、拗怒糾曲皮剥げ骨堅く、嵯峨嶠巒宛然枯木の如し、更に山に入りて林を穿つ、山愈高うして谷愈深く、林を隔てゝ溪聲淙然たるを聞き、林叢を貫ひて斷崖の頭に至れば、雪糸縷々谷より出でゝ須臾にして膚合し、鞋下皆白し、漸くにして山頂に達す、之を一の宮と云ひ第一峯の頂上とす、復登る山愈嶮にして路益嶮一步一愁或は巖角を攀ぢ、或は樹根に倚り匍匐す、加ふるに路傍は千仞の谷一步脚を失せば四大粉塵し倏ち奈落の底に墮落すべし、之を五倫坂の險とす、漸くにして慶松室堂に達す、之を第二峯の頂上とす、山頂水あり極めて清冽、神氣爽にして疲勞を忘る、休憩暫時、坂又坂曰く餓鬼か喉、曰七坂、曰御廐、峻坂を越ゆる三四氣喘奄々たり、坂頭に出で炬を掀して之を觀れば春風駘蕩の時に似て野花研を競ふ、之を御花島と云ふ、是より登ること數百歩、山開けて一大廣原となる之を彌陀か原と云ふ、原野茫々一望際涯なし、時正に八月の盛夏なるも北風面を掠めて指端凍る、仰げば一弓の新月大空に懸りて淡々水に似たり、

已にして室堂に達す、堂は矮ふして長四間幅二間許、室内爐を設けて暖を取る、燃くに松葉を以てす、煙烟室に漲りて咽ぶばかりなり、東人西客此中に横臥す、暫時休憩搏飯を開きて之を食ふ時既に

十八日、午前五時、東天漸く白ふして旭陽將に昇らんとす、余等一行合力に別れを告げ直ちに行裝を整へ神官に隨ふて登山の一行に加はる、石礫鑿々石齒呀々、鞋を刺し足を噛む、漸く御前の絶巔に達す、一祠あり、之を白山比咩神社本院とす、堂後の小丘に内務省地理局測量標あり、標下に踞して望めば、天空海闊大汝劍山眉睫の間に接し、直哨劍抄望むべくして攀つべからず、就中劍山最も危峰矗々たり、御前の麓に三池あり、西北の谷にあるを紺谷地獄と云ひ、東南の谷にあるを翠が池と云ひ、綠波清澄鏡の如し、唯千蛇が池麓にありて層冰積雪に填塞せられて自然に平地をなせり、更に眸を放てば白雲漫々として大瀛の浩渺として一望際なきが如く、獨り木曾御岳は白浪を拔て嶄然として東に聳へ、乘鞍鎗か岳立山の諸山又其側に峙し、環拱起伏翠浪の如し、遙かに白雲模糊孤峰の突起せるを見る、神官曰是れ美濃惠那岳なり、俯して南を望めば飛州の群山齧峰斷雲の内に隱見し、雲霧其間を點綴し、往來翁霍條々聚り候ち散じ、歩武變幻方物すべからず、時しも旭陽杲々として昇り妙光精發、毫光萬道、倒まに天心を射り、天光山色上下掩映し御前山峰を雲間に影出す、顧みて前の坂路を望めば嚮の老樹喬木森然として天を摩するものは其妙を平視し、雲烟脚下に生じて雪の如く、飛鳥の背を觀る、此に於て益此山の崒然峭拔よく風波を擣ぎ神州第一の名山たるを知り、神氣浩然、羽鶴凌風の懷ひあり、惜むらくは雲烟模糊平野河流海濱

島嶼城邑の大觀を歷々指點するを得ず、携帶の望遠鏡更に其効を奏せざりしを、

顧眄の間神官神扉を開きまつる、我等一行と共に拜跪し虔敬畏縮すること多時、神官言ふ、此社は實に白山比咩神を奉祀すと、良久して乃ち一行と共に大汝に向ふ、大汝は御前を距ること廿五町、石礫累々歩に從ふて崩れ下り、鑿々として聲あり一步一喘遂に頂上に達す、徘徊四顧天朗にして日麗かなり、碧漢萬里御前は隆然として崛起し、翠か池澄碧玻璃の如し、池邊遙かに觀る導者少年と偶語す、僅かに寸餘にあり、晝中観る所の者の如し、一祠あり、是を白山比咩神社奥院とす、社前茅鞋積んで丘をなす、蓋し此山に登るもの必ず此處にて穿つ所のものを棄つるなりと、乃ち一行亦穿つ所のものを棄つ、已にして神官錦帳を半ば掲げ、我等一行と共に合掌し寅若畏縮す、神官云ふ此社は實に大己貴命を奉祀すと、但靈境久しう駐るべからず、因つて急に道を轉して大添口に就き左指右點前望後顧山を評し嶽を品して下る、偶鷺鳥飛躍せり、同行山崎君窮追之を獲ふ、大さ鳩の如し、白羽翩翩間ゆるに黝色を以てす、聲秋蟲に似たり、導者來り諄々故事を説き、此鳥は神使なり乞ふ捕ふるを止めよと、余等之に從ふ、是より枝柯盤偃たる五葉松の間を下り行くこと八町、路頭盤石横はり上に水を湛ゆ、之を御手水鉢と云ふ、乃ち一憩して相與に豪中の捕飯を探り之を啖ふ、時に終古の雪は玲瓏として渓谷を填塞す、八月盛夏身は白瓊堆裡の客となり、雪を削て之を食ふ、神氣爽にして炎暑を忘る、憩ふこと久ふして進む、時に驕陽炎威を中天に振ひ溽暑金を鍛せんと欲す、加之石角足を噛み惡草は根を結んで窄蹊を沒せんとし、偶密林に入るも草は蒸すが如く、更に涼味なく、此時倦怠實に極まれり、苦汗流れて衣絞るが如く隨ふ

て拭へば隨ふて流る、神沮し氣耗し寸歩も容易ならず、眼を放つて前程を望めば、林又林、坂又坂、白雲脚下に汪々たり剰さへ渴すること甚だしく池を尋ね泉を求むれども兩つながらなし、道に登山者に遇ふ、問ふに泉の所在を以てす、曰く是より一里許なりと、乃ち奮起渴を忍んで進む、既にして美女坂に到る、右は則ち絕壁萬仞雲烟密布し窈然として其底を見す、左は亦峻谷數十丈中間人を通する處馬巒上を行くか如し、是を千翠か鼻と云ふ、強風横しまに來らは勢ひ奔馬の如く、稍愼まされは則ち其捲去する所となり頓て奈落の鬼とならん、登者所在を失する皆此處なり、是の如きもの數箇處心悸骨驚す、是より急坂を攀ち、密林を穿ち、略行を過ぎ棧道を經、岩角を躡み峻坂を降る、一步一喘、口中一滴の唾液を止めす、乃ち相言て憩ひ、捕飯を啖ふも舌根乾渴咽に下らず、徒らに眼珠を輾轉す、相顧みて咲笑を發す、唯白雲は林間に横はり、飛絮の如く面に觸れて冷を覺ゆるのみ、一步一息勇を鼓して進む、坂將に盡さんとする時、泉其下に湧く、掬して飲むに便にす、就て渴を癒す、水極めて甘冽、是れぞ有名なる御壺の水にぞある、俗に船底丘上大乘寺池水白山に通すとは即ち此水なり、涼風に吹かれながら行厨を出して其餘す所を食ひ休憩多時乃ち去て水無八町に向ふ是れ峠尾の川源、水流石下に伏するの處、巨岩相錯はり大石相亂れ、迂曲盤旋して螺旋の如きを見る、愈深くして愈幽、其盡くる所を見ず、加ふるに白雲脚底に起り澎湃匝地咫尺を辨せず、人をして覺えず粟を肌に生せしむ、乃ち更に勇を鼓し亂踏して進む、步行漸く速ゆに峠に轉する石の如く虎に騎するの勢の如し、大石盡くれば川なり、乃ち衣を攝し瀬を涉ること里餘、顧みて過ぎし跡を望めば懸崖萬仞斷雲の間に隱見し、路繚回して蟠龍の岩山を抱き

て雲々に似たり、是より時尾川に沿ひ匂々として岩を噛んで奔邊する水流を瞰視して下ること又、山漸く開け流漸く緩に林路漸く淺し、林路盡きて人家を見る、則ち直ちに家人に問ふ、此地尾添村を距ること里許と、是より平路坦々砥の如く漫々として行き尾添村山崎方に着す、時方に午後七時乃ち沐浴し畢はり燈火を點し晚餐を喫す、菜羹甚だ粗なり、而も羊酪の味に勝れり、飢腹飽きて快眠に就く、當日の行程八里餘なり。

十九日、鶴聲曉を告げて東天白し蹶起口を嗽き午前五時朝餐を喫し訖はりて宿泊の勘定をなす、物價の貴きこと驚くに堪えたり、加ふるに亭主道錢を貪る、余等之に從ふ蓋夷狄の國に在りては夷狄の事を行ふの意なり、輕裝宿を出て中宮村に到る、村を距る數丁水崖殊に高き處、橋梁を架す、所謂細腰杵橋は即ち是なり、是より平路且つ談し且つ笑ひ陶然として樂み悠然として行く木滑吉野を經て鶴來に着し某茶店に憩ふこと久しく飽食一番午後四時茶店を辭し悠々漫歩す額谷村に到る頃ひ日は暮れて月尚出せず、八時半地黃煎明に入り香林坊を過ぎ廣坂を踰て練兵場に向ふ醫王山卸ろしの風面を拂ひ我等が疲勞を慰むるものゝ如し、天德梵鐘九點を報ずるの時家に歸る、家人出迎へ温顏余か無事に歸るを喜ぶ、乃ち入浴して先づ數日經歷せし珍景奇觀を談し、是より快夢一場日既に三竿に昇るを覺へす、

(完)

大根布村附近の人類學材料

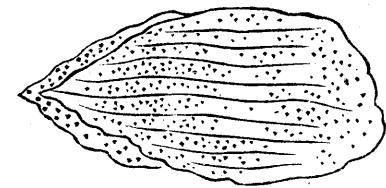
天外生

石川縣河北郡大根布村附近の海濱は助教授須藤求馬氏の貝塚土器祝部土器朝鮮土器、及曲玉管玉

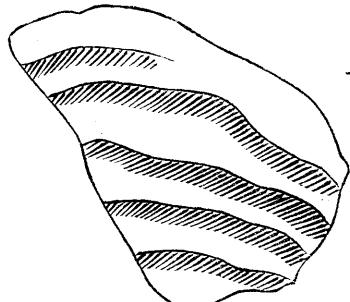
石斧石簇等の發見以來其名を人類學上に顯はしたり加能の地古來蠻族の生存せる所にして頗る人類學材料に富み殊に大根布村の如きは金澤市を距、二時里程に過ぎず古代人類生活の一般を研究せんと欲する有志の士何ぞ一日の暇を費さざるを得んや今や我校端艇會の練習艇を蓮湖に泛べたれば日曜日一日の快を蓮湖に買ふの士は必ずしも人類學者に非ずと雖も一步砂丘を越へて日本海の海濱蒼々たる波濤岸を洗ふ所を逍遙し古代人類の遺跡を探究するも亦快ならずや

余癖あり人類生活の變遷及地球歴史の移動を研究せんと欲す好奇心止むると能はず一日大根布村の遺跡を探らんと欲し須崎に到り校友霜村柳田松村の諸君に請ふて舫舡を蓮湖に泛べ大根布村に上陸し地質學用の鐵鎚一挺を手にし砂丘に沿ひ荒屋の方向に進むと數町にして砂丘を登り海濱に出でゝ之に沿ふて大根布の海濱に向ふ此間十數町一個の石簇（俗言矢の根と云ふ）でも採取すると能はず大に失望し將に歸らんとするの時折よくも漁夫の來るに會せり即ち彼れに問ふに石簇（俗言矢の根と云ふ）の所在を以てす曰く尾山（金澤の一名）より石簇採取に來るもの多しと雖も得て歸る者は殆ど稀なり蓋し風雨の爲に砂石を洗ひ流されたる後ちに非ずんば得ると難し然りと雖も熱心に探れば一二個位得ざるともなからんかと丁寧に其所在を指示す乃ち彼の指示に従ひて行くに砂少なく土砂の（？）の小なるものを採取し又砂丘中に黒土の堆積層露出せし所に於て土器の歎損せるものを採取したるも惜哉土器は歎損したるを以て其何ものなるや知る能はず矢根石内一個は白黝色中に茶褐色の斑點あり他は眞黑色殘の一は白色なり

甲



乙



曲玉は豌豆大にして中央に孔あり其色薄碧色なり
 (甲)は其種類判然ならずと雖も内部は灰色にして外
 部は淡赤色なり其製法粗にして横線あり其間に細
 き孔あり泥砂の混物にして火成のものに非ずして
 日光を以て乾かしたるが如し(?)

(乙)は内外共に黝色にして内部は殆んど平にして外
 部は灣曲す而して圖の如き横線あり其形は現今之
 木皿の缺損物の如し

以上記載したる六種のもの余が薄識淺學を顧みず
 愚案を示したるのみなれば其眞偽は知らずと雖も
 聊か参考の材料に供するのみ

石簇を採取せんとする諸君は前述せし如く風雨の
 後を好時機とす而して其所在地は砂丘中に少しく地面の固くして泥砂の固結したる所にして草の
 生ずる所には決して發見すると能はずと云ふ或は村童に白銅一個位投與して案内を命ずるも可な
 らんか

土器類は砂丘中に黒土地層の露出したる所にあり余は暇なく遺憾ながら他日に残し歸りしも土人
 の言に従へば根布栗崎間の海濱に於ては完全なるものを發見し得べしと云ふ土器類を得るには探

取器として鍍鎧を要すべし

採取者は金澤より下金石街道に出て大野村を過ぎ大野の海濱に沿ふて荒屋の方向に進むべし歸路
 は荒屋より河北潟に沿ひ須崎に出づるを便とす

以上記する所は只事實を畧述するに過ぎる也其文の拙なると學の淺きを咎めずして同志の諸君研
 究する所を以て教訓を垂れられんとを請ふ



雜報

秋氣逼る

花霞未だ拂はれざるに先んじて綠幕天地を蔽ひ、すでに錦繡紅綺の満山を蔽ふ者を見る。其間僅かに一日の如しと雖も頭を回らせはまさに半歳、春は逝き夏は去りて今や、聲林に笙竽を弄し淪池に一葉を舞はしむ、あゝ秋天肅殺の氣草木を黃落し去りてまさに人に逼らむとする歟。月は高く風は白くして雁字斜に飛ぶ。いふこれ人を愁殺するの時

古來秋を吟詠する者多くは悲愴の思情を以てこれを厭世的の辭句に寄す。滔々としてこれならざるはなきも青年尊ぶところは其活氣に在る也光緒にある也。彼の時代に於て已に冷灰の如くに更に隱遁者流を學ぶが如きものあらば、何を

之と對してロンティースの一連、ボーグ飛びラ運動場の秋

ツケット舞ふて巧に勝敗を争ふ熱球空を切り桿棒風を劈く底球一部の偉觀日未だ淺くして試みられずと雖、思ふに旬日を出でずして大々的マッチの廣告を見るを得ん

運動場の秋は先づこれなりと云はんか

ボート成る

發起人諸君の非常なる瘁盡と縣知事校長初校内外有志諸賢の不憇贊助によりて、ボート會は既に成立し、二隻のボート亦已に新調成り回航終りて粟ヶ崎の渚汀に繫がれたり、此掲示一たび生徒溜に出れば、健兒腕鳴り脾動ひて短鞋輕装長堤二里の草を蹂躪し、馳せ行ひてオールを握るもの日に數十人、渺たる河北の濤、白鷗の夢温かなる時なしといふ、壯哉北陸男兒の意氣、斯の意氣銷せず、海國思想の興否何ぞ憂ふるを須ひむや、寄語す會員諸君、諸君は陸上運動部々員諸君と相提携して校風發揚の原動力たらざ

以てか偉業を後世に遺すとを得ん、唯夫活潑々地、渾身の意氣吐て而して百里の虹霓を綴れ、若夫袂を濕ふして落葉蛩聲に悲むの暇あらば七寸の艸鞋乞ふ嶮岳の絶壁を攀ぢ、一葦の扁舟希はくば蒼海の怒濤を蹈めよ、我校既に短艇部の設けあり、健兒舷を打て高く吟ずるの時、雄心雲の如くにして海若伏さむ。謂ふ所の浩然の氣養ふに於て豈難しとせむや

あゝ秋を悲しむもの我輩且らく與せじ

運動場の秋

秋は秋のみ、學校の秋何の異なるどころかあらむ。運動場裡秋草深く、老樞天に沖して萬葛漸く紅葉す、まだこれ尋常一樣たりと雖、赤鬚風に搖かし碧眼時に白ろく、我校のムルドック先生、頻りに衆生をあつめ、場の中央クリクケットの技は盛んに行はる

之と對してロンティースの一連、ボーグ飛びラ

幾年の苦學業漸く成り、俊髦の衆才更に進んでる可らず。若夫此會成立史の精細なるものに至ては該會理事之を次號に報導するの約あり、乞ふ之を待て知ることを得む。

卒業證書授與式

赤門に出入せんとす、まさにこれ羽翼北海の濤を搏ち、扶搖萬里の風に乘せとする者。

時はこれ七月の三日、我校大學豫科第一回即本部第七回の卒業證書授與式を行ひ、廣く招待狀を市内名望の門に發す、當日來つて席に列せしは留守第六旅團長坂元大佐三間石川縣知事を初めどし、陸軍武官石川縣高等官裁判所判檢事衆議院議員諸學校長等幾十名を以て數ふべきに至る午後の二時に式を始めて三時半に終はる、其景況の如きは例によつて例の如き而已、勅語捧讀に次ぎて校長演壇に上ほり。嚴肅なる句調を以

て親しく卒業生が向後につきて教ゆるところあり、これに於てか卒業生徒總代堀内秀太郎君、席を進んで以て答辭を朗讀す、其辭に云はく、爰に本校本部第七回の卒業證書授與の盛典を舉行せられ校長閣下親しく朝野貴賓の面前に於て卒業證書を賜はる生等の光榮何ぞこれに如かん蓋し生等今日ある所以は實に本校多年教養の賜也豈謝せざる可けんや生等自今以往益拮据黽勉上は以て天恩の萬一に報ひ奉り下は以本校教養の鴻恩に答へんと庶幾せん謹て一言以て謝辭に代ふ

卒業生總代 堀内秀太郎 理科志望生 中川詮吉 農科志望生 米丸忠太郎、中村篤房 以上

卒業生氏名 法科志望生 堀内秀太郎、相良歩、鎌谷辰三郎 中村可雄、遠藤泰次郎、境長三郎、桐生政次、金 森外見男、小原清吉、島彌太郎、島田文之助

工科志願生 中屋重樹、今岡純一郎、西出辰次 郎、富田薰、青山虎市、小島甚太郎、若林彌一郎、西池民文、鈴木周二、木部一枝、前川益次、本居庄吉、高松徳次郎、鹽井松太郎、石黒爲次

るところ也、

北溟の怒濤怪物を生ず、跳つて南を圖るもの抑も誰とかなす、健在なれや三十餘君、我輩大希望を以て諸君の腹上に置かむとす

學年始業式

學年を送りて學年を迎ふるは、なほ年を送り年を迎ふるが如きか、唯學年を迎ふるの日は、屠蘇の酒以て我れを酔はしむるものなく醪牙の飴以て我れを飽かしむるものなきのみ

新入の諸君を迎ふ

始業式は即ち九月十六日を以て舉げられぬ、當日校長忌引の爲高安醫學部主事代りて式を行ひ新舊諸生を一堂の下に延きて紹介の勞をとり、更に新生に對して校風を遵守して違背せざるとともどめ、これより一般學生に攝生の法を説けり、主事に次きて席に進みしは秋山教授也、これまで校長の代理として本學年特待生の姓名を披露す、則ち左の如し

一部三年法科生佐藤信安同文科生茨木清 郎杉本榮一郎小松倍一二部三年工科生岩田 成實一部二年法科生高橋清一同文科生丸山 環鈴木保臣二部二年工科生堀覺太郎二部一年工科生柳田友麿阿部政二郎

これを以て其日の式を終ふ、職員席を辭して衆生散亂するの時、團々四に集まりて頻りに特待生諸氏を慶賀する者を見る

らざる者あるを覺えしむ、吁諸君が入會せらるる所以豈に漫然たるべきものあらむや、必ずやよく會の主意とする所と目的とするところを究めたるべく、既に入會すればまた會員としての責任義務を悉く解せらるゝならむ

本會またこの一機關雜誌を有し、我輩非才強て舉られて其編輯委員となる、今日委員として聊か請はんと欲するものあり、即ち諸君が本會に對し一點の赤誠まことに人を欺かざるあらば、瑠玕を一揮して雄篇卓説を投じ、本誌をして耻を他校に得ざらしむるのみならず、優に數歩を抜きて所謂四高の四高たる所以を輝さしめよ、これを以て新入會員を迎ふるの辭となす

新入學生

この學年に於て、第三高校より大學豫科二年に於轉學し來れる者法科十人文科六人工科一人三部

に一人合せて十八人にしてまた管轄内の各尋中
教授澤田吾一軒操教師野村櫻衆の二氏は願によりて其職を免ぜられ、理學土河合義文、文學士上田整次、文科大學撰科卒業生得能文、富山縣曹宮川爲三、柔道家岩崎法賢の諸氏は前後相繼尋常中學校助教諭村田金太郎、陸軍砲兵一等軍曹宮川爲三、柔道家岩崎法賢の諸氏は前後相繼

で、新たに職を我校に奉ぜらる。旦に東客を送り夕に西客を迎ふ、悦ぶもの真に悦ぶにあらずとは、是れ所謂彼の賤者の常、我輩青衫豈にこの浮薄なるものあらむや。師となり弟となり、學を教へ學を受くまた幾多の因縁なしとせむ、熱淚數行離別の間に灑ひて二先生の去るを送る

而も我輩また送るを悲しむが故に迎ふるに悦びずといふものに非ず、寧ろ悦んでこの新諸先生を迎へ、徐ろに其情好をして先きの二先生に於けるが如きものあるを希ぶ、あゝこれ一に薰陶の如何に依る也

編輯員の交迭

小川得藏君事を以て今度編輯員を辭職せられしにより文科二年河原始二君推されて其後を襲はる、我輩はこゝに去る人を惜しみ来る人には、これより其力を盡されんとを望む

謹んで萬歳を唱へん歟

今井岡村兩教授は五級俸を下賜せられ岡村浦井兩教授は高等官六等に花輪教授は正七位に陞叙せられ高橋教授また贈給せらる、我輩謹んでここに萬歳を唱へん歎

我核文科二年生飯森亥三郎工科二年生阿部信行

野田寺町、寺の一を妙典寺となす、一日其門に

悲んで送り悦んで迎ふ

の二氏は今度士官候補生の試験に及第し、要塞砲兵に擇ばれて不日横須賀に赴かる
故金子閣男君の友人本核出身の工科大學生西崎細野竹田納富松村の諸氏の發起にて同君が生前大學に於てデザインしたるステムエンジンの模形を造りこれを我校に寄せて永く同君の令名を傳へ且つは後學の諸世を益させんと、この計畫を贊して鶴見左吉雄森山守次中川忠順石田莊二宮川重太郎の五氏熱意奔走して廣く我學生に寄附金を募集し、以てこの義舉を完成せしめんと謀る、あゝこの般の事また美ならずや、紛々たる輕薄の世上稀に見るところ、我輩永く四高の美風を唄はんかな

歌文會九月二十八日を以て公苑覽勝亭上に開けり兼題卽題のこと例によりてまた例の如し、

阿部飯森兩君送別會

墨痕淋漓の貼紙あり、大書して曰く、阿部飯森
兩君送別會と、蓋し我學友阿部信行、飯森亥三
郎二君か士官候補生試課に合格し、任に横須賀
に赴かんとするを送るものなり、午後四時衆既
に會し席已に定る發起人總代として本會發起の
理由を陳し、前途猶遠し二君今後の奮勵を冀望
すと述へたる者は石田莊一君なり、勇壯の文を
綴り激越の辭を吐て以て其行を壯にせる者は森
山守次君なり、阿部君先づ立て之か謝辭をなし
て曰く、在校三年、終始懶惰者の「チヤン」たり、
今や去らんとするに蒞み此盛宴を張らる、何の
辭か能く謝せん、然れども諸君か赤誠に報ゆる
に一夕の空話を以てす、是れ僕の取てせざる所、
唯請ふ將來の行動如何に察せよと、亦大丈夫の
言にあらずや、飯森君次て起つ、慷慨眉を昂げ
肩を聳かし叫て曰く、昨今何の年ぞ、國光赫灼
たり、和魂燐爛たり、而かも我校海陸軍志願者

多きを加へさるは何そや、奮へ、男子意ある者
は來り談せよと、依て諄々一臂の力を添へんこ
とを誓ふ、友情眞に掬すへし、若し夫れ大島校
長の演述に至りては吾人か胸中を披瀝して餘り
ありとや云はん、無聲堂裡虎豹を壓して之か手
耳を取りたる者は飯森君にあらずや、「グラウン
ド」場内群鷄を麾て之に鶴聲を傳へたる者は阿
部君にあらずや、彼は軀幹勇偉狀貌山法師に似
たるを以て、巖山と渾名せらる者、此は清秀奇才
の麒麟兒、自から稱して懶惰者の「チヤン」と呼
ふ者、蔚鬱凌霄の巨松は灑洒勁直の翠竹に對し、
雄姿穿雲の猛鷲は逸氣制鵬の上鷹と並ぶ、共に
是れ出群の器、我校一朝之を失ひ運動場裡特に
斯人なきを憾むと雖ども、而かも邦家百年の爲
め豈に此兩干城を得たるを賀せざるべけんや、
望むらくは相携へて横須賀に在るの日、北陸の
雙壁として能く我校の面目を發揮せよ、既にし

て酒肴運配離觴是れ躍る、肴に山海の珍味ある
にあらず、酒に醸釀の美香あるにあらず、淡泊
雰囲は丈夫の本領、意氣相許す學友六十餘名、
起ては樽酒を暎て劍舞斗牛を貫き、坐しては肩
背を叩て雄談一世を空うす、秋山教授舞ひ、大
島校長吟し滿室喧然湧くが如し、耳熱し腹足り
出で、欄干に倚れば商風面を吹て心氣爽然、眼
下を流るゝ犀川水清うして石白し仰げば巍然宏
壯の煉瓦館、遙かに暮色模糊の中に在り、燭點
せられ興更に加ふるも、七時を過ぎて寺内閑寂
夜と共に一輪の朧月を見るのみ、實に是れ九月
廿八日職員の會する者大島校長を始め秋山今井
花輪福岡の四教授須藤福見の二助教授及び岩崎
書記

新學年の初、諸君と復た相見るの第一日に
於て、吾人は泣て會員間の訃音を傳ふるの

已むを得ざるに遭ふ、不祥、吾人の筆は折
るべし、而も事實は記せざる可らず
昨夏本校を卒業して直に工科大學に入り、
俊英を以て聞えたる金子閣男氏は、暑中休
暇を了へて、再東京に上る途次、上州磯部
驛に於て卒然虎瘦に罹り、本月十日、遂に
遠逝せられたり。又昨夏三中より轉じ能文
を以て、同窓間に知られし文科三年生市村
武氏は、京都に歸省中、客月十八日脳病と
脚氣の爲に病歿せられたり、又豫備一級生
五明文平氏は六月三日脇室扶斯を以て逝か
れたり、

人生朝露の如し、生死もと愛惜す可きに非
ずと雖、前途多望有爲の身を以てして、一朝
二豎の犯す所となり、恨を呑で空しく九泉
の下に逝く、痛惜哀悼せざらむと欲するも
得むや、嗚呼悲哉

編輯難

編輯難編輯難、編輯員必ずしも支離者には非ざる可く、支離者にあらざるよりは、なほ筆を揮ふて墨痕淋漓、大ほら貝を吹き立つ可き歟。乃公由來文筆に名あり紙を展ふれは百句千言立ろに成らんなど、はうそその骨頂也、月に一回の北辰誌數へ來れば七八十頁。

武士は食はぬも高楊枝、鷹は餓ても穂をつまずとは云へ、表に立派なる顔をし乍ら内腹にものなき程つらきものはなし、毎度紙後に大々的文字を列ぬ、玉作積て山の如きも紙數限りありなど云ふは、表を裝ふ大法螺とは知らずや、投稿函を傾れば舞ひ出つは一葉二葉のみ、學事半ば拋つにあらずんば到底満足すべき雑誌は發刊せらる可もあらず、若夫諸君に背かざらんとせば、哀れ及落の程も計り難からむ、傍人戯れに編輯員を嘲りていふ、天下痴人あり頗まれざ

るに人の牆壁をつくらふ、顧みれば其家の牖戸は壊れて寒月照らし、妻子餓に泣き已れまた衰ふ、あゝ子の如きこの痴人たらざらむやと、人はかくも我輩を見るかな

既に北辰會立ちて機關雑誌發せられ我輩推されて其委員となる、思ふに會の雑誌を出す所以唯玩弄半分のすさびにあらざる可く、既にして我

輩に托するものまた偶事にも非ざる可し、故に此際我輩の奮つて起つもの唯筆を動かすを樂むが爲に非ず、而も彼の所謂他人の牆壁をつくるものなりと云はんや、幾日を費やし、心力を盡し月々雑誌を諸君に頒つ所以蓋し我輩をして止むを得ざらしむるが故而已

請ふこれを云はん歟、雑誌の盛衰はまた以て校名の興廢に關せん、幾多の機關雑誌を見ては竊かに其校の如何を想ふは蓋し形影の理確かに存するあれば也、あゝ氣焰萬丈論説欄に在る者、

我輩有爲人士が其校にあるを羨やみ、麗藻簇雲文苑内にある者、我輩幾多文士の其窓にあるを羨やむ、羨やむと謂へは意義頗る陋なるが如し、あゝ陋や陋や我輩をして此語を言はしむる者思ふに北辰誌上また風雲を呼ぶものなきが爲か、北辰誌にしてこの不幸ありとせば、問ふ校名はこれと反比の現象を見るべきか

校名の興廢は苟くも席を列するものゝ、漫然として看過すべきにあらざらむ、特別會員と稱する者、皆これ堂々たる諸先輩なるに、其文篇の多く誌上に見るなきを憾となす、通常會員の雄篇卓說今に至つてなほ見る可からずとせば、我輩大に我校の爲めに悲しむ、あゝ四百青衿のうち誰れか濟々の多士を疑はん、何ぞ夫れ其手腕を揮ふに吝なる、見す／＼他校の嘲を蒙むるを知りて而も我會の爲めに盡さるは如何、あゝこれこれを自暴自棄といふ

るあるもこれ蓋し、諸君のうち義務を盡さる者あるが爲也。

これのみにても編輯難を説くにあらず、唯夫々々的障害物の其間に横はれるが爲也、この障礙物、聊か排除し得たらんが如きも、未だ前述の事全く具備するに非ざるよりは我輩また編輯難を口にせんと欲す。

余れ誤て學校を憂へ北辰會を憂へ遂に人をして今は余れを憂へしむるに至る、而もこれ一點亦誠の存するところ、よし渾身の意氣希くは當初の精神を貫徹せむか。願ふところは會員また會員の責任を盡してまた編輯難を説かしむる勿れ。

○本誌は面白くなし讀むに値せずといふ人あり、自ら面白くすることなきとして獨り編輯員のみを責る人は、編輯員と共に其責を負はざる可らざるなり。

- 本誌は編輯員の雑誌に非ず、諸君の雑誌に非ず、我辰章校の雑誌なり、我辰章校の校風を外部に向て發揚するの機關なり、我辰章校我北辰會の事業史なり、諸君は編輯員と共に永く之を忘る可らず。
- 本誌は諸君が愛校の赤心より發する所の温き同情に依て輔弼するなくんば、編輯員が硯缺け筆折るゝの時來らむも、終に復光彩陸離氣焰萬丈の光景を呈するの秋は到らざるべし。
- 本誌の振不振は直に我會、我校の振不振に關聯する多きを知らずや。
- 本誌を愛する人は我會に忠實なる人なり、我會に忠實なる人は我校を懷ふ事深且大なる人々、然らざれば然らず。
- 責任を知る人よ本誌の本領を知る人よ温き同情を有する人よ本誌を重ずる人よ愛する人よ、吾人が眞知己は唯是等諸君あるのみ。
- 諸君聽け、投書函内常に寂寥をつぶやくものあるを聽かずや。

投書心得

一投書ハ本會原稿用紙に限り御認めありたし一長文と雖も全文を寄贈せされば掲載せず一雑誌上には雅號のみを記載するとを許せとも姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は徳義に背くものは一切掲載致さるべし

明治二十八年十月十五日印刷
全十月廿一日發行

編輯兼發行者

中川忠順

金澤市五十人町十一番地

印 刷 者

第四高等學校北辰會

英舍

株式會社秀 東京市京橋區西糸屋町廿六七番地

